

The Journal
of
Flannery O'Connor

✦フラナリー・オコナー研究✦

第5号

野口肇先生追悼号

日本フラナリー・オコナー協会

January, 2026

ISSN 2188-9716

目次

【巻頭言】 第5号発行にあたって	田中 浩司 (3)
【追悼文】 野口肇先生、長い間お世話になりました	渡辺 佳余子 (5)
野口先生との思い出(1)	久保 尚美 (11)
野口先生との思い出(2)	一瀬 厚一 (14)
【論文1】 <i>Wise Blood</i> (1952)の言語と構成論理	亀田 政則 (17)
【論文2】 「グリーンリーフ」—肉体への制裁を介した魂の救済	加藤 良浩 (45)
【会 則】	(61)
【投稿・執筆規定】	(63)
【活動報告】	(64)
【事務局より】	(72)
【筆者紹介】	(73)

【巻頭言】

第5号発行にあたって

日本フラナリー・オコナー協会会長
田中 浩司

本学会創立会長であり、日本におけるフラナリー・オコナー研究を長年にわたり牽引してこられた野口肇先生が2024年9月16日に逝去されました。先生が日本の英文学研究、とりわけアメリカ南部文学研究の分野において果たされた役割、ならびに本学会の設立と発展に寄せられた尽力は、ここにあらためて記しておくべき重要な事柄であると考えます。

野口先生は、アメリカ南部文学のなかでも、フラナリー・オコナーの作品世界を中心に、文学と宗教の関係、南部という土地の歴史的・文化的背景、さらには作品に登場する人物たちの内的葛藤や信仰の問題を、丹念なテキスト読解によって結びつけてこられました。その読解は、作品を理論的枠組みに回収するのではなく、個々の表現や語りの細部に即しながら、そこに潜む宗教的想像力や倫理的緊張を丁寧に掬い取るものでした。作品に語らせることを重んじるその姿勢は、研究方法としてのみならず、文学研究に向き合う態度そのものとして、今日においても多くの示唆を与えています。色々の学会・研究会にまで足を運び、日本におけるオコナー研究に関する文献書誌の整備もしてこられました。

また、野口先生は教育者としても長年大学教育の現場に立ち、文学作品を精読することの厳しさと歓びを学生に伝えてこられました。講義や演習を通じて培われた研究姿勢は、教室内にとどまらず、多

くの教え子や若手研究者の学問的基盤となっています。2013年に日本フラナリー・オコナー協会を創立されて以降は、研究誌の刊行、研究会の開催などを通じて、研究を継続的かつ共同的に進めるための環境づくりに尽力されました。本学会が今日まで活動を継続し、多様な立場からの研究成果を共有できているのは、先生の先見性と献身的な取り組みに負うところが少なくありません。

本号に収められた論考の多くは、野口先生が長年取り組んでこられた問題意識と、さまざまな形で響き合っています。それぞれの論考は、先生の研究を直接的に継承するものに限らず、その学問的営みを踏まえつつ、新たな視点や方法から問いを立てようとする試みでもあります。追悼にとどまることなく、研究を継続し、議論を重ねていくこと—それこそが、本学会に課された役割であり、先生の築かれた学問的遺産を生かす道であると考えます。

本誌が、フラナリー・オコナー研究およびアメリカ南部文学研究のさらなる深化に寄与するとともに、野口肇先生の学問的精神を静かに受け継いでいく場であり続けることを願い、第5号発行にあたっての挨拶といたします。

【追悼文】

野口肇先生、長い間お世話になりました。

渡辺 佳余子

野口肇先生は、フラナリー・オコナー協会を病気療養のため休会していらしたが、必ずまた参加されると信じていた私は、先生が2024年の9月に永眠されていたことを知り、大変驚き深い悲しみに暮れた。ご逝去された野口先生に心よりお悔み申し上げると共に、オコナー協会会誌追悼号にて、先生と私の30年以上に亘るつながりについて語りたい。

野口先生と初めてお会いしたのは、互いに40代前半の頃であった。私は都内の私立短大英文科の専任講師として勤務していたが、ジョージア州ミレッジヴィルで1994年に開催された「フラナリー・オコナー没後30年祭(‘The Habit of Art: an Interdisciplinary Celebration of the Legacy of Flannery O’Connor’)」に参加した。最終日に‘Flannery O’Connor Abroad’ と題するオコナーの海外での評価を探るパネルがあり、私は日本について発表した。この学会では、サリー・フィッツジェラルド(Sally Fitzgerald)をはじめとして、著名な研究者たちと知り合うことができた⁽¹⁾。この国際学会に野口先生がいらしていたかどうかはわからないが、日本での某学会で初めてお会いしたとき「日本におけるオコナー研究の第一人者は、九州の大学に在籍されているM先生ですよ」とおっしゃった。このことは、私がまだ業績もない無名の教員という立場にもかかわらず、日本の代表であるかのようにパネルに参加したことを批判されているように感じたものであった。しかし、私の心配は杞憂に終わり、先生と私は大切な研究仲間になることができた。

この初対面での会話の後でも、私は国際学会に参加し続けた。ジョージアでの学会の翌年(1995年)には、ユタ州のブリガム・ヤング大学で行われたオコナーの生誕70周年を祝うシンポジウム

(Flannery O' Connor and the Christian Mystery)に出席した。4日間の学会は、サリー・フィッツジェラルドやウィリアム・セッションズ(W. A. Sessions)など傑出したオコナー学者による総会での6つの講義に加えて、朗読会、懇親会、遠足など充実したプログラムで開催されたが、25会場で3から4組の研究者による「セミナー」と題された研究発表が中核をなしていた。前年度のパネルで登壇者となった私は、多くの研究者と知己になることができ、学会最終日の「秘跡の世界」(The Sacramental World)と題されたセミナーで3人の研究者の発表の進行役を務めた。前日には、フェリス女子大学のM先生が「比較と方策」(Comparisons and Strategies)と名づけられたセミナーで、オコナーの『賢い血』と瀬戸内寂聴の『草笈』を比較研究された。先生は2013年に発足した「日本フラナリー・オコナー協会」の創設メンバーの会に出席された。1999年、私の最後の国際学会への出席は、ALA、第10回年次大会(American Literature Association)であった⁽²⁾。この大会では、早朝に開催された朝食会(Flannery O' Connor Breakfast Session)に出席した。2002年にオコナーの伝記を出版したジーン・キャッシュ(Jean Cash)等、著名なオコナー研究者たちに再会できた。ALAは、2025年に第36回を迎え、2026年は、シカゴで開催される。

この国際学会を最後に、私は勤務校の教育や雑務に追われて、海外の学会に行くことはできず、勤務校の紀要に執筆することが唯一の研究になった。しかし、共に「日本フラナリー・オコナー協会」の創設メンバーであった野口先生は、私とは対照的にオコナーの研究を続けられ、1985年という早い時期に単著『フラナリー・オコナー論考』を上梓され、私に献本してくださった。以後、『フラナリー・オコナーの世界』(1988年)、90年代には『フラナリー・オコナー研究』(1992年)、『フラナリー・オコナー』(1998年)と続けて単著を出版された。上述したように、この頃、私は国際学会に参加してはいたが、オコナー研究を深く掘り下げることはできなかった。今世紀になっても、野口先生のオコナー研究は一層深化され『フラナリー・オコナーの南部』(2005年)、『日本におけるフ

ラナリー・オコナーの文献書誌』(2007年)、『アメリカ南部の宗教風土 フラナリー・オコナーの生きた世界』(2009年)、『見えるものから見えざるものへ — フラナリー・オコナーの小説世界』(2015年)、そして生前最後の単著となった『フラナリー・オコナーを読むために』(2022年)と相次いで著書を刊行なさった。野口先生は、これらのご著書をすべてご恵贈くださり、私は熱心に読み、感想を寄せたことをなつかしく思い起こしている。たくさんの著書の中で、最も感銘を受けたのは、オコナーの『文献書誌』であり、その詳細で精密な調査に圧倒された。

野口肇先生とは、コロナ禍が蔓延する前は、定期的に居酒屋で「3人会」と称して、他愛もない話に花を咲かせたものだった。他の1人は、野口先生の勤務校の同僚で私とは大学院で同窓の年下の女性であった。先生は、駄洒落を連発して楽しみ、3人は、良く飲み、食べ、笑い、素晴らしいひと時を過ごした。先生は、必ずご馳走してくださり、私たちには支払いをさせてくださらなかった。明るくて、集まって懇親会に参加されるのが常であった先生であるのに、2023年の夏開催のオコナー協会の後の懇親会を初めて欠席された。私が「珍しいですね」と聞くと「ちょっと足が痛くて」と答えられた。この会話が先生と私の対面で交わした最後のものになるとは、思いもよらなかった。

野口先生と私が交わした最近のメールに寄る会話について紹介したい。

「Kさんが英国の大学で学位を取りました。喜ばしいことです。機会がありましたら、3人でお会いしたいと思います。」(23/3/18)

「早く良くなって、3人会で一杯やりたいと思っています・・・今、隣で孫が自治会から頼まれた花火大会のポスターを描いています。彼といるときが、至福の時です。」(24/7/13, 07:09)

「月に1度の血液検査などの結果は良好だと言われています。隣家に住む孫は毎日我が家に来て、一緒に本を読んだり遊んだりしていきます。息子の仕事の関係で週に数日は息子と孫と一緒に夕食を

いただきます。昨夜はこちらに泊まり、朝食も一緒でした。彼が生きがいです。いつも孫のことでごめんなさい。ご主人の手術の成功を、心よりお祈りしております。オコナー協会のことも、よろしくお願ひします。」 (24/7/13, 16:43)

「一昨日、月に1度の血液検査等を受けてきましたが、OKでした。薬は朝食後11種類、夕食後4種類服用していますが、たいしたことありません。ご主人もきっと大丈夫です。良い結果をお待ちしております。ご夫婦ともども、ご自愛ください。(2024 7/24)

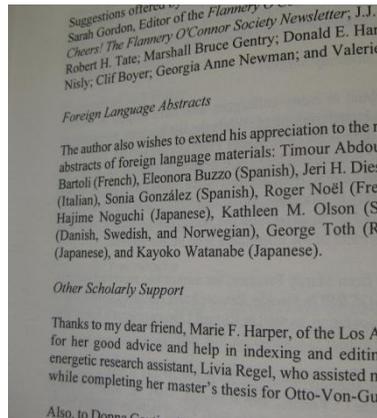
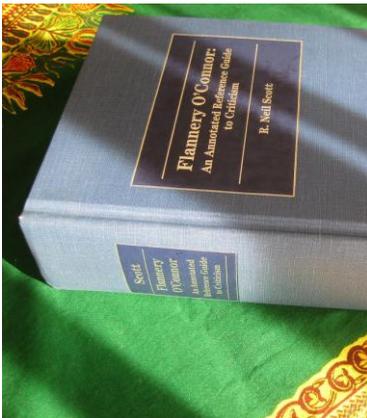
野口先生が、お孫さんのY君をととても愛していらして、文字通り「目に入れても痛くない」という状況が伝わってくるメールが多かった。そして、私の夫が野口先生と同じ病に罹患したことを伝えると、ご自分のことよりも心配され、超人的な優しさを注いでくださった。オコナーの伝記を10年かけて執筆したジーン・キャッシュが、オコナーの友人マリアット・リー(Maryat Lee)宛ての最後の手紙(1964/7/28)で、ニューヨーク在住の友人が卑猥なはずら電話を受けたことを心配し「警察に通報したほうが良い」と記していることを「死期が迫っている人が書いているとは思えず[オコナー]自身については、英雄的ともいえる無関心」であり、「死に至る病と上手に付き合うことができた理由だ」と述べている⁽³⁾。(伝記、317頁) オコナー研究の第一人者として活躍された野口先生もまた、同様に、研究仲間の配偶者について身内のように心配され、励ましてくださったことに心から感謝している。

終わりに、野口先生が、フラナリー・オコナーについて語られた言葉はオコナーの作家としての姿勢について、大変に的を射たものであると感じることができた。ここに引用させていただく。

オコナーは、「神と向き合う」という自分にとって切実な関心事を多くの人間の関心事とし、また、個人的な意義を普遍的な意義にしようとして、作品を書いたのである。確かに、

彼女はキリスト教に依拠して物を見、作品を書いたが、そのテーマは特定の宗教、特定の場所を超越したものである⁽⁴⁾。
(64 頁)

アメリカ南部で出版された、図書館情報学の分野で知られているネイル・スコット氏による大部の研究書の「謝辞」に、野口先生と私ともう1名の日本人女性の氏名が掲載されている。こうして、野口先生と共に掲載されていることは、私の誇りであり宝物の研究書になった⁽⁵⁾。



注

- (1) 「フラナリー・オコナー没後 30 年祭」 『英語青年』 (1994 年 10 月)
- (2) 「第 10 回 ALA 年次大会に参加して」 『英語青年』 (1999 年 12 月)
- (3) Cash, Jean W. *Flannery O' Connor: A Life*. U of Tennessee P, 2002.
- (4) 「見えるものから見えざるものへ — フラナリー・オコナーの世界」 松本昇/大崎ふみ子/行方均/高橋明子編『神の残した黒い穴を見つめて—アメリカ文学を読み解く/須山静夫先生追悼論集』音羽書房鶴見書房, 2013 年
- (5) Scott, R. Neil. *Flannery O' Connor: An Annotated Reference Guide to Criticism*. Timberlane Books, 2002.

野口先生との思い出 (1)

久保 尚美

私が野口先生に初めてお目にかかったのは、2013年3月26日の日本フラナリー・オコナー協会の設立大会でのことでした。設立大会へお誘いくださるメールを頂いた際には、それまで著書を通じて仰ぎ見ていた先生からご連絡を頂いたことに、たいへん驚き、恐縮したことを今でもはっきりと覚えています。そして大会当日、会場で実際にお会いした先生は、どなたにも穏やかな笑顔で接しておられ、その温かなお人柄に私もすぐに惹かれていきました。

オコナー協会でご一緒させていただくようになってから、先生から学んだことは数えきれません。しかし実際には、初めてお目にかかる以前から、私は大学院でフラナリー・オコナー作品を研究するなかで、すでに先生のご研究に導かれておりました。オコナーに関する先生のご業績のなかで、私がとくに深く影響を受けたのは『日本におけるフラナリー・オコナー文献書誌』でした。博士論文の執筆にあたり、大学の図書館でこの書誌を手にしたときのことを、今も鮮明に覚えています。膨大な文献を収集し、精緻に整理・編纂されたその書誌に触れ、先生の誠実で緻密なお仕事に、まさに圧倒されました。野口先生の編まれた書誌は、今後日本におけるオコナー研究全体の発展に欠かせない礎でありつづけるものと思います。

研究対象に対する揺るぎない探究心と情熱もまた、私が野口先生から学んだ大切なことの一つです。先生は、オコナーの作品研究・作家研究において数々の成果を残されました。1985年刊行の『フラナリー・オコナー論考』から2022年刊行の『フラナリー・オコナーを読むために』に至るまで、書誌を含めオコナーの名を冠した単著は九冊にのぼります。その一冊一冊には、オコナ

一研究に向けられた先生の尽きることのない情熱が注がれており、幅広い見識に裏打ちされた論考が次々と発表されるたびに、身の引き締まる思いがしました。先生が長年にわたり積み重ねてこられたご研究の歩みは、私のような後進にとってまさに道標となるものです。

2017年からは事務局担当者としてオコナー協会に関わるなかで、先生から学んだことの一つは、人と人との関係を尊重し続けるという姿勢です。協会の運営についてご相談を差し上げた折に、心に残るやりとりがあります。しばらく参加のない方の会員資格の扱いをお尋ねしたところ、先生は「一度ご縁のあった方とのつながりを絶やさず大切にしたい」とおっしゃいました。研究の場を単なる会員制度とはせず、人と人との関係を大切にされる姿勢には、先生の協会に対する、また人に対する思いが凝縮されているように感じられました。オコナー協会の温かさは、野口先生のこうしたお人柄と理念に支えられてきたのだと、いま改めて実感しております。

そして何よりも、野口先生のお話を直接伺うことは、研究の刺激であると同時に、本当に楽しいひとときでした。懇親会の中では、ビールが大好きでいらした先生はお酒を嗜まれるにつれてすこし饒舌になられ、これまでの研究についてさまざまにお話くださいました。なかでも、アメリカ滞在中に現地の研究者や関係者、さらにはオコナーのご親族に直接会ってお話をされ、ときにはその方々のご自宅に招かれて交流を深められたという数々の逸話は、まるで小説の一場面のように印象的で、いつまでも耳を傾けていたいものばかりでした。そうしたお話を、もう直接お聞きすることができないと思うと、あまりに寂しく、残念でなりません。

野口先生がご体調を崩され、オコナー協会の会長を辞任されたのは2024年の3月でした。その後も協会の様子をお伝えするメールをお送りすると、先生からは「早く会に出席できることを念じています」というお返事や、「検査の数値はOKでした」とい

うお返事をいただき、私もまたすぐにもお目にかかれるものと信じておりました。しかし昨秋にお送りしたメールにご返信がないまま、12月に奥様よりご連絡をいただき、そのなかで、野口先生が9月にご逝去されていたことをお知らせくださいました。そのお知らせを受けてから、間もなく一年が経とうとしていますが、いまだに信じられない思いです。

野口先生が開いてくださったオコナー協会は、私にとって、オコナーについて自由に、そして専門的に語り合えるかけがえのない場であり、自分の研究のホームというべき存在になりました。何よりも楽しく刺激的な時間を過ごすことができてきたのは、先生が中心にいてくださったからこそだと思います。今後は、私たち後進が力を合わせてオコナー研究の場を維持・発展させていくことが、少しでも先生の思いに応える道であると信じています。先生の温かな笑顔と、研究への尽きることのない情熱を礎に、先生が結んでくださったご縁を大切に、これからも学びを深め、歩みを続けていきたいと考えています。

野口先生との思い出 (2)

一瀬 厚一

野口先生と初めてお会いしたのは、2017年、私が博士後期課程3年生で、その年に行われた大学院の特別講義の時でした。講義が終わったあとに、野口先生を囲んで懇親会が行われ、そこで先生と色々なこととお話させていただきました。先生は講義を含めると5~6時間お話をしていたので、声がかすれて出てこなくなり（それは咽喉がんの治療をしたことによるものだと後から伺いました）、そこからは筆談を交えながらお話ししました。私はその時の野口先生の活力に圧倒されたのを今でも鮮明に覚えています。

それから半年後、私は大学院を卒業して、母校で非常勤をすることになり、毎週木曜日に出講していました。講師室に向かうと、そこには野口先生のお姿がありました。先生も私の母校で非常勤をなさっていたことは知っていましたが、出講の曜日が重なっていることは知りませんでした。恐る恐るご挨拶すると先生は驚いていましたが、私の事を覚えてくださっていました。そこから毎週木曜日は授業の1時間前に出勤して、先生とお話することが習慣になりました。色々なこととお話ししましたが、例えば、私が国立近代美術館へ吉増剛造の企画展を観に行ったこととお話すると、吉増のこのみならず、大江健三郎、ポール・エングルなど様々な作家の話（一般的な伝記的情報ではなく、先生と彼らとの交流に基づく話）をしてくださいました。また研究については「毎年論文1本と研究発表1回はすること。発表の場を外に求めることで、様々な人の意見を聞くことができるからだ」と先生は私に仰ってくださいました。そこから私はそれを毎年の目標として研究していました。

このような交流が続くなかで、野口先生が私をオコナー協会へとお誘いくださいました。先生との交流は、個人的なものも含め、その後も続きました。2024年3月、先生にご連絡を差し上

げたところ、体調が悪くがんが見つかったことを伺いました。それを聞いてとてもショックでしたが、かつて先生が咽喉がんを克服されたので、今回も克服なさるだろうと勝手な希望を抱いていました。それ以来、先生のご様子を伺うために、時折メールでご連絡を差し上げていました。お見舞いも兼ねてお中元の時期にお品をお贈りしたところ、思いがけず先生からお電話を頂戴しました。先生が定期的に検査・通院されていて、そのときは検査の結果もまずまずで、小康状態であることを伺ったので、良くなれることを確信し、先生にお会いできることを楽しみにしている旨を申しあげました。ところが、これが先生との最後の会話になってしまいました。その年の秋になってからは私自身忙しくなり、先生にご連絡を差し上げていませんでした。年末にご挨拶のメールを差し上げたところ、いつもなら1日以内に返信があるはずが、お返事がありませんでした。ご病状が悪化されたのだろうかと思い、日々メールを確認していました。年が明けてから先生の奥様よりお便りを頂戴し、先生がご逝去されていたことを知りました。その瞬間の驚きと悲しみは今でも忘れられません。なぜもっと先生とまめに連絡を取らなかったのか、先生とお話する機会を自分から作らなかったのかとひどく後悔しています。

野口先生がご病気であることを伺った際に、先生からオコナー協会の幹事についての打診をいただきました。「専門外の私になぜだろう、もっと適任の先生がおられるだろうに」と思いましたが、先生からのお話なので、ありがたくお引き受けいたしました。あのタイミングでの打診だったので、オコナー協会のために貢献するよにとの先生からのメッセージであったと、今となっては受け止めています。先生が愛した協会のために、これからも微力ではありますが、尽くしていければと存じます。

今も私のメールボックスには、先生との最期のやり取りが残っています。先生の文面を読み返すたびに、先生の明るく優しい声と笑顔を思い出します。それにもう接することができないなんて

とても信じられません。野口先生とのご縁に心より感謝するとともに、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

【論文 1】

Wise Blood (1952)の言語と構成論理

亀田 政則

要約

キリストに取り憑かれたアメリカ南部 (Christ-haunted/ Christ-obsessed South)。その大地で、自らは何ごとにも信じようとせず (I don't believe in anything.)、ノン・センスセンスに満ちた「十字架に磔けられたキリストのいない真理の教会」(The Church of Truth Without Jesus Christ Crucified) を説く虚無主義者、ヘイゼル・モーツ (Hazel Motes)。Flannery O'Connor (1925-64) の *Wise Blood* (1952) をめぐるこの論考では、(1) ヘイゼルが用いる言語、とくに状態動詞 (state verb) としてカテゴライズされる 'believe' がもつ意味論的特性 (semantic characteristics) を明らめ、(2) 彼が抱く宗教的確信 (a deep black conviction) の構成論理 — それは、① If Jesus existed, I would not be clean. ② I'm clean. ③ I'm not clean. という三つの命題の組み合わせから成る。ここでは、 p : Jesus exists. q : I am clean. と記号化する — の変遷過程に着目する。すると、ヘイゼルは、彼の人生の最後に、それまで「存在否定」($(p \rightarrow \neg q) \wedge q \rightarrow \neg p$) し続けてきたキリストの「存在肯定」($(\neg p \rightarrow q) \wedge \neg q \rightarrow \neg p$) へと行き着くことが判明してくる。

1. 0 この論考について

この論考では、Flannery O'Connor (1925-64) の長編小説 *Wise Blood* (1952) の「言語」と「構成論理」に着目し、その意味論的分析にもとづく解釈をおこなう。

2. 0 作品世界の背景: キリストに取り憑かれ、苛まれたアメリカ南部 (Christ-haunted/ Christ-obsessed South)

2.1 ヘイゼル・モーツ (Hazel Motes) と彼をめぐる人物たち

ヘイゼル・モーツ (Hazel Motes)。まともに読んだ本といえば、『聖書』だけである。¹「自分は何も信じない」(I don't believe in anything.²)と明言し、「今・現在」「この場」に生きる自分の五官で捉えられないようなこと ([I]t was not right to believe anything you couldn't see or hold in your hands or test with your teeth.³)、ましてやイエスの存在を信じるなど「間違い」であると考えて。それゆえ、自分は当のイエスが「存在していた」としても、⁴「信じはしなかったであろう」と公言する。

“Do you think I believe in Jesus? ...Well I wouldn't even if He existed. Even if He was on this train.”⁵

さらに、人間の「墮落」(Fall) というものはなかった。ゆえに「贖罪」(Redemption) もなく「審判」(Judgment) もなかったと主張し、人間の罪の贖いのために流されたキリストの血で穢れていない「十字架に磔けられたキリストのいない真理の教会」(The Church of Truth Without Jesus Christ Crucified⁶) を説く。

“I preach *the Church Without Christ*. I'm member and preacher to that church where the blind don't see and the lame don't walk and what's dead stays that way. ...it's the church that blood of Jesus don't foul with redemption. ...Listen, you people. I'm going to take the truth with me wherever I go....I'm going to preach there was no *Fall* because there was nothing to fall from and no *Redemption* because there was no Fall and no *Judgment* because there wasn't the first two. Nothing matters but that Jesus was a liar.”⁷

しかしながら、当のヘイゼル自身は、彼が嘘つき呼ばわりし、その存在を否むイエス・キリストとの関係において、自らの魂の「清さ」(cleanness⁸)に深くこだわりつづける人間なのである。⁹

彼の祖父。固陋なるキリスト教原理主義の巡回説教師 (a circuit preacher¹⁰)。人間の「下劣さ」「罪深さ」に執拗なまでに言及し、聴く者を精神的に追い込んで、イエスの十字架の死による「贖罪」の必要性を説く。¹¹

盲目の説教師を装うホーク (Sabbath Hawke)。「イエス」の名においてひとびとの慈悲心をあおり、¹² 施されたた金で密かに酒をあおる。¹³

“Help a blind preacher. If you won’t repent, give up a nickel. I can use it as good as you. Help a blind unemployed preacher. *Wouldn’t you rather have me beg than preach?* Come on and give a nickel if you won’t repent.”¹⁴

彼が物乞いのさいに用いる条件文の「前提」(If you won’t repent) から、論理的に妥当な「結論」としての“Give [up] a nickel”を引き出すことはできない。前提が“if you repent”であってもよい。要するに、ホークが言いたいことは、「希求法」(optative mood)に擬した「命令法」(imperative mood)とも言える表現法をとる、“Give [up] a nickel!”の一言に尽きる。

ところが、このような詐欺師ホークは、イエスの存在を否定するヘイゼルに対して、

“Listen boy,” he said, “*you can’t run away from Jesus. Jesus is a fact.*”¹⁵

と言い放つ人間でもある。(オコナーは、ここで、「偽善者にも真実を語らせる手法」を採っている。)そればかりではない。彼の口から放たれるつぎのような言葉 — あきらかに「マルコによる福音

書」8:18 の言葉(ὄφθαλμοὺς ἔχοντες οὐ βλέπετε, καὶ ὦτα ἔχοντες οὐκ ἀκούετε. [“Having eyes do you not see, and having ears do you not hear.”]¹⁶⁾ のもじりである — を通してヘイゼルの「現在」の存在状況が明るみ出され、彼の「行く末」もまた暗示されている。

“You got eyes and see not, ears and hear not, but *you’ll have to see some time.*”¹⁷⁾

すなわち、物理的「視力」と「聴力」が確保されてはいるが、肝心なもの・ことが「見えず」、肝心なことに「耳が開かれていない」ヘイゼルの「現在」の存在状況と、やがて消石灰で自らの目を焼き潰し、¹⁸⁾ 自己を世界から遮断した後に「見なければならず」「耳を澄まして聴かなければならない」もの・ことに直面することになるヘイゼルの「行く末」が暗示されているのである。

そして他に登場するのは、博物館から盗み出した小男のミイラを「新しいイエス」(new jesus¹⁹⁾) と呼ぶイーノック (Enock Emery)。ただ金儲けのだけのために、「キリストのいない聖なるキリストの教会」(The Holy Church of Christ Without Christ) という、こっけい感満載の教会 — この教会では、「イエス」という存在は、金儲けのために利用できる「商品」と化してしまっている！ — を喧伝するショーツ (Hoover Shoats)。そのショーツに金で雇われ、「預言者」を騙るレイフィールド (Solace Layfield²⁰⁾) などなど・・・かれらは、いずれもが、〈変・妙・奇・妙なしかたで〉イエスに取り憑かれ、そのイエスに苛まれながら、生きている。

2.2 サクラメント (sacrament) なきアメリカ南部のキリスト教

アメリカ南部のキリスト教。そこでは日常言語と宗教言語の意味領界が絡み合い、浸透し合い、不明瞭かつ混沌としている。“Jesus”という語は、— *Wise Blood* のなかで 117 回ほど言及されている。それ自体が、まさしく“Jesus!” である！ — もはや「呼びかけ」や

「祈り」「懇願」にとどまらない。それは「呪い」「罵り」「不信」「驚き」「恐れ」「失望」そして「苦痛」の表現でもある。「学問」としてのキリスト教神学、それに基づく宗教言語の文法システムが確立されていないところでは、「神」や「イエス」という語の「意味」は、ひとびとによる主意・主観的かつ無秩序な「使い方」あるいは「使われ方」²¹へと墮する。

このような精神的土壌に立つ南部のキリスト教は、「 sacrament²²」なき、「手前勝手に打ち立てられた宗教」(a do-it-yourself religion) である、とオコナーは述べている。

“The religion of the South is a *do-it –yourself religion*, something which I as a Catholic find painful and touching and grimly comic. It’s full of unconscious pride that lands them in all sorts of ridiculous religious predicaments. They have nothing to correct their practical heresies and so they work them out dramatically.”²³

彼女が述べていることが正しいとすれば、その大地で目にする教会祭儀 (Liturgy) や祈りさえもが〈自己意識—内—完結行為〉あるいは〈自己解釈的了解行為〉²⁴の域内にとどまり、自己を突破して〈存在の神秘〉に触れる手立てとはなっていないことになる。

ヘイゼルの「十字架に磔けられたキリストのいない真理の教会²⁵」もまた同類項である。彼が説く「孤高の教会」—それは信仰共同体 (ἐκκλησία²⁶) なき、「ヘイゼル独りの教会」であるといういみで、“Church” と呼称するには無理がある。彼が乗り回す「エセックス車」は、彼が動き回るための手足ではあるが、「非人格的パートナー」にすぎない — もまた自己解釈的了解行為に基づくものであり、「 sacrament」の存在意義は、もちろんのこと、問題外である。

3.0 ヘイゼルの「旋毛曲がりな確信」 (a deep black conviction) が孕む論理的矛盾

キリストに取り憑かれ・苛まれたアメリカ南部という精神世界で生まれ育ったヘイゼル。巡回説教師の祖父 — 彼は孫のヘイゼルに対してさえも無礼な人間であった²⁷ — が説くようなキリスト教原理主義に倦み疲れていた彼には、つぎのような「旋毛曲がりな確信」(a deep black conviction²⁸)があった。

“The way to avoid Jesus was to avoid sin.”²⁹

①「人間の「贖罪」のためにイエスを必要とするというなら、イエスを避ければよい」というこの確信は、②「イエスを避ければ、罪を犯すことから避けられる」という確信につながる。そしてこの確信は、③「罪を犯すことを避けるためには、イエスの存在を信じないことである」³⁰ という確信へとつながる。さらに、① — ③が可能であれば、④「イエスの存在を必要としない教会も可能である」という確信へと至る。ヘイゼルは、このような「風が吹けば桶屋が儲かる」式論法にもとづいて、「人間の贖罪のために血を流すイエス」(大文字で表記される「キリスト」としての“Jesus”)ではなく、(小文字で表記される)純然たる人間である「新しいイエス」(a new jesus)による「十字架に磔けられたキリストのいない真理の教会」の必要性を説くに至るのである。

“The Church without Christ don’t have a Jesus but it needs one! It needs a new jesus! It needs one that’s all man, without blood to waste, and it needs one that don’t look like any other man so you’ll look at him.”³¹

とはいえ、ヘイゼルは、彼が避けようと努め、その存在を信じないとするイエスの上に、矛盾に満ちた教会を打ち立てようとしていることに変わりはない。そればかりか、“Jesus”が“a new jesus”なるろうとも、イエスからは逃げられない — ここで、ホークがヘイゼルに言い放った言葉 (“Listen boy, you can’t run away from

Jesus. Jesus is a fact.”) が響いてくる！ — ヘイゼルがそこにいる。

4.0 イエス (Jesus Christ): ヘイゼルの魂の「清さ」(cleanness)の「基標」(benchmark)

存在するものの「真」(truth)「偽」(false)を感覚与件 (sense-data) にうったえるヘイゼルは、イエスの弟子・トマスのようなだ。

Ἐὰν μὴ ἴδω ἐν ταῖς χερσὶν αὐτοῦ τὸν τύπον τῶν ἥλων καὶ βάλω τὸν δάκτυλόν μου εἰς τὸν τύπον τῶν ἥλων καὶ βάλω μου τὴν χεῖρα εἰς τὴν πλευρὰν αὐτοῦ, οὐ μὴ πιστεύσω. (“Unless I see in his hands the print of the nails, and place my finger in the mark of the nails, and place my hand in his side, I will not believe.”)³²

「今」「ここに」在り、「ここで」起きていることがすべてなのだとするヘイゼルにとって、仮にイエスが「存在していた」としても「過去のこと」であり、アダムとイヴが犯した罪もまた、「今現在」に生きるわれわれが関知することではない。人間の「墮落」、キリストによる「贖罪」「審判」にしても、然りである (2.0 参照)。にもかかわらず、このようなヘイゼルの「旋毛曲がりな確信に反して、彼の存在の根底にはイエスが通奏低音 (basso continuo) のように存在し続け、彼の魂の「清さ」を推し量る「基標」となっている。

「十字架に磔けられたキリストのいない真理の教会」を説き始めた当初、彼が抱いていた魂の「清さ」を推し量る基標を構成する宗教的確信 — それはやがて大変貌する「時」を迎えることになるのだが — は、つぎのように論理構成されていた。

(a) イエスが存在していたというなら、私は清くはありえなかったであろう (If Jesus existed, I wouldn't be clean.³³)。)

- (b) 私『は』清い (I AM clean.³⁴)。
(c) それゆえ、イエスは存在していない。

5.0 *Wise Blood* の言語と構成論理

ここでは、*Wise Blood* というテキストにある「言語」、とくに状態動詞 (state verb) としてカテゴライズされる “believe” とテキストの「構成論理」に着目しよう。そうすることによって、①この作品世界全体を鳥瞰できるばかりではなく、②ヘイズルの存在状況 — それは彼が抱いていた宗教的確信 (the system of Hazel’s religious convictions) の変遷と一体となっている — を浮き彫りにできると思われるからである。

5.1 「信じる」こと:状態動詞としてカテゴライズされる “believe” の意味論的特性

WB (1985)のテキストに現れる「信じる」(believe) という動詞は、“think,” “realize,” そして “understand” などと同様に、文法的には「状態動詞」としてカテゴライズされる。そしてこれらの動詞は、当の本人にしか確証できない「私秘的なこころの状態」(a private state which can be subjectively verified³⁵) を意味・表示する。

例えば、私の友人の Q が「ネス湖にはネッシーが存在する」と信じている (こと) は、発話行為 (locutionary act) の一環としての音声行為 (phonetic act) がなされることがなければ、私をふくめた他者には観察できない「Qのこころの状態」なのである。

同様に、誰かが「神が存在する」(God exists.) と、音声行為をともなったしかたで「主張すること」は観察可能である。しかしながら、「神が存在する」と「信じている」ことは観察できない。だれかがなにかを「信じている」ことは、そのいみでは、「私秘的なこと」と見なす傾向がここにある。³⁶

当初、ヘイゼルがイエスを避けるために — それは罪を避けるすべに等しい (The way to avoid Jesus was to avoid sin, and *vice versa*.) — 抱いていた「奥底の計り知れない、旋毛曲がりな信念」もまた、「観察できないこころの状態」である。これにたいして、ヘイゼルのつぎのような音声行為をとおして、彼のこころにあるものが観察可能なものとして浮かび上がってくる。

“Do you think I *believe in* Jesus? ...Well I wouldn't even if He existed. Even if He was on this train.”³⁷

Phrasal verb の “believe in” は「何らかの信じる対象」への「存在委託」を意味する。ここでヘイゼルが言っていることは、それゆえ、「たとえイエスが『存在していた』としても、そのイエスに『存在委託することはなかったであろう』」といういみで、「信じることはなかったであろう」ということになる。

ヘイゼルがこのように言う背景には、2.0 と 3.2 で指摘したように、「今」「ここで」自分の五官を通して直接経験できないもの・ことを信じるのは間違いなのだ、という私的確信に由来する。

彼が人間の「罪」とキリスト・イエスによる「贖罪」に言及するさいも同様である。

“If I was in sin I was in it before I ever committed any. There is no change come in me. ...I don't believe in sin.”³⁸

“There's not the sin, nor blasphemy. *The sin came before them.*”³⁹ “If there is any *Fall*, look there, if there was any *Redemption*, look there, and if you expect any *Judgment*, look there, because they all three will have to be in your time and your body and where in your time and your body can they be?”⁴⁰

しかしながら、これらのことを理由に、なにか「信じる(こと)」を「こころの内にある問題」あるいは「私秘的な事柄⁴¹」に還元し、

そこに安堵すると、われわれは深刻な「デカルト的病」(Cartesian disease) — 心 (mind) は身体 (body) から独立して存在する実体である、と考える機械論的・二元論 (mechanical dualism) から由来する人間存在の歪んだ理解⁴² — に罹患することになる。

5.2 「信じる」こと：“Believe”の意味論的立ち位置

誰かが何かを「信じる (信じている)」(believe/believing) ことの意味世界は、英語学における文法的視野では捉えきれないものがある。何かを「信じる」ことは、言語哲学的視点を加味すれば、「何かは現実化に向けていつも潜在しているが、観察できない状態にある」といういみで、“disposition”⁴³ と考えるのが妥当である。この日本語にし難い “disposition” — ここでは、ひとまず「態勢」という訳語を充てることにしよう — の概念把握については、W. V. O. Quine と J. S. Ullian による事例が参考になろう。

“...believing is a *disposition* that can linger latent and unobserved. It is a *disposition* to respond in certain ways when the appropriate issue arises. To believe that *Hannibal crossed the Alps* is to be *disposed*, among other things, to say ‘Yes’ when asked. To believe that frozen food will thaw on the table is to be *disposed*, among other things, to leave such foods on the table only when one wants them thawed.”⁴⁴

この事例に沿って、キリスト教共同体 (教会) において、復活の主日 (Easter Sunday) — 「キリスト・イエスの死からの復活の祭儀」が中心となる — におこなわれる「洗礼式」の言語行為 (speech-acts) を考えてみよう。その洗礼式では、司祭が洗礼志願者に向けて、

「あなたは、十字架に磔けられ、・・・葬られ、三日目に復活し、天に昇り、・・・生者と死者を裁くために来られる、神のひとり子イエス・キリストを信じますか？」

と問い、洗礼志願者が

「信じます」

と応答し、洗礼が遂行されてゆく。

このように、何かが「適切な時」(at an appropriate time)に、「適切な場所や状況」(at an appropriate place/ conditions)で、「適切におこなわれる」(properly conducted)とき、われわれはなんらかの「適切な応答」(an appropriate response)ができる「態勢」にあるわけである。このようないみにおいて、何かを「信じる(こと)」もまた、ひとつの「態勢」であると見なされる。⁴⁵

Ryle (1990) は、“believe” と並んで、なんらかの確定可能な「態勢」を表示する語 (determinable dispositional words) として、“know,” “aspire,” “clever,” “humorous”などを例示している。そして “know” と並んで、“believe” を dispositional verb (何かを遂行しうる) 態勢「にあることを示す」動詞とみなしてもいる。⁴⁶ また、“disposition”は、“habit (L. habitus)” (訓練や実践によって獲得され、身につけているもの)⁴⁷ と考えることもできる。たとえば、チェロ奏者のように、長きに亘る修練の果てに「身につけているもの」は、いつでも音楽作品を現実化 (演奏遂行) しうる「態勢」にある。

5.3 「信じる」こと：ヘイゼルの〈虚無〉が明らかにする “believe” の意味論的領界

だが、もともと「自分は何も信じない。」 (“I don’t believe in anything.”⁴⁸) と明言するヘイゼルにとって、— 「自分は何も信じない」ことを「信じている」という〈パラドックス〉がここにある。

これは、虚無主義者 (nihilist) の典型的な言表である — 「信じる」ことは、意味論的にみて、「な・ん・で・も・な・い・こ・と」なのである。それゆえ、彼が雄弁に

“I preach there are all kind of truth, your truth and somebody else’s, but *behind all of them, there’s only one truth and that is there’s no truth. No truth behind all truth is what I and this church preach!*”⁴⁹

と語る場面においても、つきつめると、「な・ん・で・も・な・い・こ・と」を語っているにすぎない。彼はいくつかの言葉を発音したが、意味論的に突き詰めて言えば、「とくに何か意味あることを言っているわけではない」のである。

「真理というものはない、というのが唯一の真理である。」「すべての真理の背後に真理はないというのが、私とこの教会が説くことなのだ」と言うヘイゼル。彼は「非存在が存在する」(Not-being exists. ⁵⁰) と述べるソフィストと異ならない。「『真理というものはない』という真理が『存在する』。」「『すべての真理の背後に真理はない』という真理が存在する」と言っているに等しいからである。

「何も信じない」ことを信じているヘイゼルにとって、「真理なきところに教会は立たず」などという命題は、そもそも〈無・意・味〉(nonsense) である。にもかかわらず、それこそがまた〈無・意・味〉なのであるが、ヘイゼルはその〈無・意・味〉のなかに、自らが「信じる」教会を打ち立てるというのである。

このようなヘイゼルの言動は、自らが虚無主義の淵を漂流していることを暴露するばかりではない。文法的には、「状態動詞」のなかにカテゴライズされる“believe”が、「事実に反すること」や「証明されていないこと」、「ありえないこと」「不可能なこと」をも真実だと受け入れる意味領界 (semantic domain) を包摂していることを明らかにする。⁵¹

もうすこし詳しく考えてみよう。「窃盗を働き、現行犯で警察に逮捕された」という「客観的事実」があるにもかかわらず、逮捕された息子をつぎのように弁護する母親の言動がある。

「なにかのまちがいですよ！あの子にそんなことができるはずがありません。あの子は真面目な子なんです。悪いことなんかしません。いいえ、ありえませんよ！私は、絶対に息子がそんな人間ではないと『信じます！』」

窃盗を働いたという「事実」を、「事実ではない」と「信じる」ことはできるのである。また、あるカルト集団の教祖が、

「私は自分の体を宙に浮かせることができるし、壁を通り抜けることもできる。」

と言ったことを真に受けて「信じ込み」、その教祖に帰依するようなひとびともまた同様である。いかなる可能世界（possible worlds）を考えても、自然の法則や科学的法則に逆行するような神的力による干渉（divine intervention）がないかぎり、人間が自らの体を宙に浮かせ、壁を通り抜けることができる可能世界は考えられない。⁵² つまり、ペテン師のまやかし事のような「ありえないこと」を「ありえること」として「信じこむ」こともできるのである。われわれは、そのような事態を「狂信」と呼ぶのであるが、— その「狂信」が高等教育を受けた人間にも起きる事態であることは、「オウム真理教事件」がよく示している — 教祖を信じ込むひとびとにとっては、「信仰」なのである。

5.4 ヘイゼルの魂の「清さ」の「基標」を構成する宗教的確信：その構成論理の変遷と帰結

4.0 では、ヘイゼルが避けようと努め、その存在を否定するイエスという存在が、ヘイゼルの魂の「清さ」を押し量る「基標」となっている、と述べた。そして、当初の基標はつぎのような宗教的確信による構成論理となっていることを指摘した。

- (a) 「イエスが存在していたというなら、私は清くはありえなかったであろう」 (If Jesus existed, I wouldn't be clean.⁵³).
- (b) 「私『は』清い」 (I AM clean.⁵⁴).
- (c) それゆえ、イエスは存在していない。

ところが、ショーツの金儲けに加担する「騙りの予言者」レイフィールドを

“You ain't true,...You believe Jesus....Two things I can't stand, ... a man that ain't true and one that mocks what is. You shouldn't ever have tampered with me if you didn't want what you got.”⁵⁵

と言いなじるほどまでに憎悪を抱き、— この憎悪は、レイフィールドが「イエスを信じている」といういみで、ヘイゼルの教会が説く真理（虚無）とは対立しているがゆえのものである⁵⁶ — あげくのはて、彼の手足であるエッセックス車で轢き殺してしまう。死の間際に、

“Jesus...”... “Jesus help me.”⁵⁷

と懇願するレイフィールドの声は、ヘイゼルの耳に届くことはなかった。あるいは、彼はレイフィールドの声に耳を閉ざしていた、と言った方が正しい。

人間としての〈あるべき領界〉を踏み越えてしまったヘイゼル。その後、あたかも何事も起こらなかつたようエッセックス車を乗り回していたのだが、周辺をパトロールしていた警官の職務質問に遭い、

彼の無免許運転が発覚する。そして警官の悪計 (a mischief) によって、あのエッセックス車を土手から突き落とされてしまう。・・・啞然としてたたずむヘイゼル。彼の耳に響いてくるのは、皮肉に満ちた (“You can’t drive a car without a license.” とは言わず、その逆から攻めるという「こっけいさ」もある) 警察官の声であった。

“Them that you don’t have a car, don’t need a license.”⁵⁸

エッセックス車を失ってしまったヘイゼル。彼は 3 時間も歩いて町にたどり着くと、とある用品店に立ち寄り、そこでバケツと消石灰を買い求める。・・・そしてそのあと、彼は決然として、「自分の眼を焼き潰す」という挙に出るのだった！⁵⁹

「眼を焼き潰す」という行為は、前述したように、自分が生きて来た世界からの「自己遮断」である (2.1 参照)。彼は、「眼を焼き潰す」という〈自己に対する暴力行為〉によって、〈すべてを放下した〉のである。⁶⁰

眼から光りを失ったヘイゼル。彼の口からは、やがて次のような言葉 — その言葉は、物理的な眼の光を失った彼が、こころを挙げて「見なければならぬ⁶¹」自分の魂のありさまを反照している — が涙のように零れ出る。

“I’m not clean.”⁶²

つまり、ヘイゼルは

(A) 「イエスが存在していたというなら、私は清くはありえなかったであろう」 (If Jesus existed, I wouldn’t be clean.) という大命題と「私『は』清い」 (I AM clean.) という小命題の二つの前提からもたらされる帰結と、(B) 「イエスが存在していたというなら、私は清くはありえなかったであろう」 (If Jesus existed, I wouldn’t be clean.) という大命題と「私は清くない」 (I’m not clean.) という小

命題の二つの前提からもたらされる帰結との狭間に立たされてしまったのである！

ここでは、(A) と (B) にみられる命題を前提とする推論 (inference) を組み立て、そこから「最終的に何が帰結されるのか」を確認してみよう。そのための予備手続きとして、先ず If Jesus existed, I wouldn't be clean. という命題を If Jesus exists, I will not be clean. と簡略化しよう。そして 前件 (antecedent) にある Jesus exists. を “p” とし、後件 (consequent) の I am clean. を “q” としよう。すると、(A) からは

- (1) If Jesus exists, I will not be clean: $p \rightarrow \neg q$
- (2) I am clean: q
- (3) Therefore, Jesus does not exist: $\neg p$

という推論が生まれる。この推論を組み立てると、

$$5.41 \quad ((p \rightarrow \neg q) \wedge q) \rightarrow \neg p$$

という論理式が成立する。

この論理式を意味論的に分析すると、前件を構成する $p \rightarrow \neg q$ と $((p \rightarrow \neg q) \wedge q)$ の真理値 (truth-value) はともに「真」 (true) であり、これに後件 $\neg p$ を加えて構成される命題の全体 $((p \rightarrow \neg q) \wedge q) \rightarrow \neg p$ の真理値も「真」となる。つまり、5.41 のように考えても論理的矛盾が生じない。それゆえ、(A) を前提とする命題群からもたらされ、論理的に「真」となる帰結とは、「イエスは存在しない」となる。

一方、(B) からは、

- (1) If Jesus does not exist, I will be clean: $\neg p \rightarrow q$
- (2) I am not clean: $\neg q$
- (3) Therefore, Jesus exists: $\neg \neg p$

という推論が生まれる。この推論を組み立てると、

5. 42 $((\neg p \rightarrow q) \wedge \neg q) \rightarrow \neg \neg p$

という論理式が成立する。

この論理式を意味論的分析すると、前件を構成する $\neg p \rightarrow q$ と $((\neg p \rightarrow q) \wedge \neg q)$ の真理値はともに「真」あり、これに後件 $\neg \neg p$ を加えて構成される命題の全体 $((\neg p \rightarrow q) \wedge \neg q) \rightarrow \neg \neg p$ の真理値も「真」となる。つまり、5. 42 の真理値は「真」であり、論理的矛盾がない。それゆえ、(B) を前提とする命題群からもたらされ、論理的に「真」となる帰結とは、「イエスは存在する」ということになる。

(A) と (B) にみられる命題を前提とする推論がもたらした、対立矛盾した帰結が意味するものはなにか？それは、(1) 5. 41 で表示された「イエスは存在しない」というヘイゼルの宗教的確信が「破綻した」ことを、(2) 彼は、彼の人生の最終段階に来て、それまで頑なに「否定」しつづけてきたイエスの存在「肯定」へと行き着いたことを意味する。⁶³ 5. 41 と 5. 42 にある論理式は、そのいみで、*Wise Blood* という作品世界を「意義あるもの」とし、それを基底から支えている「構成論理」(configuration logic) となっているといえよう。

6. 0 ヘイゼルに内在する『賢い血』(Wise Blood)

6. 1 “I’m not clean.” と “I’m paying.” の真相

これまでの文脈 (5. 4 -5. 42) を辿れば、消石灰で眼を焼き潰し、部屋に閉じこもるようになったヘイゼルが、なぜ

“I can’t preach any more. ...I don’t have time.” ...“To pay,” he said in a harsh voice. ...“Pay for what?”... “It don’t make any difference for what,” he said. “I’m paying.”⁶⁴

という言葉が口から漏らしたのかもまた明らかになる。

これらの言葉は、①「罪など信じていやしない⁶⁵」と明言していた彼のなかに「罪意識」が生まれ、それに苛まれていることを、②彼がイエス・キリストを必要とする「贖罪」に与るべく歩み出したことを表している。⁶⁶

とりわけ、ヘイゼルの口から放たれた“**I’m paying.**”という言葉は、レイフィールドを「殺してしまった」ことで、人間としての〈あるべき領界〉を「踏み越えてしまった」彼が、イエス・キリストによる「贖罪」との関連において、自らの魂の状態を明確に理解したことを示している。眼はあったが見えなかった。眼は失ってしまったが、見えなかったものが見えてきたのである。

ヘイゼルがしだいに食べ物を口にしないで痩せてゆき (**He didn’t eat much,...He kept getting thinner...**⁶⁷)、金銭にも頓着しなくなる。余った金を「必要がない」(**“It was left over,” he said. “I didn’t need it.”**⁶⁸) といっぺん屑籠に捨ててしまう。ガラスの破片や砂利、そして小石を入れた靴を履いて歩く (**The bottoms of them [shoes] were lined with gravel and broken glass and pieces of small stone.**⁶⁹)。胸に有刺鉄線を巻き付けて眠る (**...three strands of barbed wire wrapped around his chest.**⁷⁰) などといった一連の事柄もまた、イエス・キリストによる「贖罪」との関連において意義をもつ。

とりわけ、胸に有刺鉄線を巻き付けて眠るヘイゼルを窺めるフラッド婦人 (**Mrs. Flood**⁷¹) — ヘイゼルの下宿先の女主人 — に対して、

“**It’s natural.**”⁷²

と答えるヘイゼルの言葉には、— 後続する“**I’m not clean.**”をその **because-clause** と考えれば納得がゆく — イエスによる「贖罪」

に与る罪の償いをとおして、イエス自身へと「融和」してゆこうとする彼の存在状況が凝縮している。

6.2 ヘイゼルに内在する『賢い血』(Wise Blood) とは？

このようなヘイゼルという存在を導いているものはなにか？それは、彼自身のなかに流れる『賢い血』(wise blood) にほかならない。オコナーは、この作品に言及して、

“Haze is saved by virtue of having *wise blood*; it's too wise for him ultimately to deny Christ. *Wise Blood* has to be these people's means of grace – *they have no sacraments*.
...”⁷³

と述べている。

しかしながら、『賢い血』は、— ヘイゼルは「賢い血をもっているゆえに救われている」という、作家としてのオコナー自身の意向 (writer's intention) を反映した言及は〈問題含み〉である。たしかに、テキストからはイエスによる「贖罪」に与る罪の償いをとおして、イエス自身へと「融和」してゆこうとする彼の存在状況は確認できるが、そのことが即「ヘイゼルは救われている」ことの確証とは断言できない。つまり、人間の「救済」などの終末論的検証 (eschatological verification)⁷⁴ を俟つ事柄は、われわれの判断を超えるものである。そのいみで、オコナーの言及は、あきらかに、踏み込みすぎていると思われる。ヘイゼルが賢い血をもっているゆえに救われているか否かについては、「開かれた問い」として、読み手のわれわれに提示されている、と考えるのが妥当である⁷⁵ — 「サクラメント (秘跡) なきひとびとにとっての『恩寵のすべ』」であることは諒解できるものの、そもそも『賢い血』とは何なのか？オコナーは明確に述べていない。

それは、いうまでもなく、血管を通して体内に流れる血液ではない。では、血のなかに生命があるとする旧約聖書的反映なのか？あ

るいは、神的存在とは峻別される存在といういみでの「人間(性)」をいうのだろうか？それとも、贖罪のために流されたキリストの血に与るべく流される人間の血なのか？

この問題を解明するためには、“blue blood” という語が参考になると思われる。それは、端的にいえば、「高貴な生まれ」を言う。具体的には、特筆すべき歴史的背景を有する、誇り高きアリストクラートの家族に流れる「血」である。⁷⁶ その「血」は、自覚的(意識的)・非自覚的(無意識)に、アリストクラートの家族(aristocrats)のなかで涵養されてきた世界観や価値観となり、それゆえの「排他性をともなう生き方」(the habit of being)ともなっている。

この“blue blood”は、良くも悪くも、アメリカ南部という「キリストに憑かれた」大地で生を享け、成長したヘイゼル自身に自覚的(意識的)・非自覚的(無意識)に内在する、「宗教的に涵養された直観的本能」⁷⁷、すなわち『賢い血』の存在を、つぎのようなアナロジーによって浮き彫りにしてくれる。

Aristocrat(s): Blue Blood = Hazel: Wise Blood

イエスとの関係において、自らの魂の「清さ」にこだわりつづけるヘイゼルは、当初“I’m clean.”と明言していたが、やがて“I’m paying.”そして“It’s natural.”と言うまでになり、最終的には、イエスの「存在肯定」と連動した“I’m not clean.”という — そこには、彼がこだわり続けてきた「魂の清さ」から深く乖離してしまっている自身の存在状況の自覚、あるいは、キリストとしてのイエスの“misericordia”(慈悲)を必要とする彼自身の“miser”(悲惨)な存在状況の自覚が凝縮されている — 「告白」へと至る。そのヘイゼルを導いていたものとは、まさしくこのような「宗教的に涵養された直観的本能」、すなわち「サクラメントなきひとびとにとっての恩寵のすべ」としての『賢い血』であったと思われる。こ

の血がヘイゼルに内在していなかったならば、彼は〈す・べ・て・
が・無・意・味・な・世・界〉の住人にすぎなかった。

註

- 1 *WB* (1985), 14: “The Bible was the only nook he read.”
- 2 *WB* (1985), 20.
- 3 *WB* (1985), 141.
- 4 *WB* (1985), 17: “Jesus been a long time gone.”
- 5 *WB* (1985), 8-9.
- 6 *WB* (1985), 37ff,
- 7 *WB* (1985), 70-1. (*All italics are mine.*)
- 8 *WB* (1985), 13-4. ヘイゼルは、軍隊生活の仲間による誘惑から自分の「魂」を破滅（墮落）させないために (...he was not going to have his soul damned by...), つまり「悪」に改宗することを避けるためには、「無」に改宗することこそがその好機と見た (...he saw the opportunity here to get rid of it without of corruption, to be converted to *nothing* instead of to *evil*). このように、ヘイゼルは自らの「魂の清さ」に深くこだわる人間であることが分かる。
- 9 *WB* (1985), 62,154.
- 10 *WB* (1985), 11.
- 11 *WB* (1985), 12-3.
- 12 *WB* (1985), 25-6.
- 13 *WB* (1985), 99: “He was often drunk and didn’t want to be discovered that way.”
- 14 *WB* (1985), 25. (*All italics are mine.*)
- 15 *WB* (1985), 33. *All italics are mine.*
- 16 *Nestle-Aland* (2005); *RSV* (1971)
- 17 *WB* (1985), 36. (*All italics are mine.*)
- 18 *WB* (1985), 144.
- 19 *WB* (1985), 119-20.
- 20 *WB* (1985), 102, 105.
- 21 Cf. Wittgenstein, Ludwig. *Philosophical Investigations*, Blackwell: Oxford, 2001, I, 43,373; Ryle (1990), 19. あ・き・ら・か・に「教育的背景に乏しい」ヘイゼルのキリスト教言語の使用にみ

られる混乱と無秩序も、このような視点から明らかにすることができる。²² *HB* (1988), 350. *A Patristic Greek Lexicon*, ed. by G. W. H. Lampe, Clarendon Press: Oxford, 2014, 891-2: “sacrament” < L. sacramentum Gr. μυστήριον: “sacrament, as relation of divine operation”. オコナーの信仰の基盤であるカトリック教会において、「サクラメント」は、キリストの人性 (humanity) を通してキリストの神性 (divinity) から流れ出る、われわれの救済において重要な役割をもつ恩恵 (の力) であると考えられている (*Aquinas S. T.* (1980), III, a. 60, 3, ad. 2m)。第二バチカン公会議 (1962-5) での神学的貢献者の一人、スキレベークスは、サクラメントにおいて、キリストが「ペルソナ的に現存する」といういみで、キリスト自身が神と人間との出会いの<サクラメント>であると見る (*Schillebeeckx, Edward. Christ the Sacrament of the Encounter with God*, London: Sheed & Ward, 1977, 60-2 et. al.)。キリストの神性からもたらされる恩恵の確証を考えるさいの好事例として、“Ex opera operato [Christi]” (By the work performed [by Christ]) — サクラメントの効果 (efficacy) は司祭などの職務者の道徳的狀態によって左右されることなく、キリスト自身によって遂行されることに由来するという神学的省察 — が挙げられる。この延長線で、*Greene, Graham. The Power and the Glory* (1940) に登場するウキスキー神父の存在・行為の意味もまた理解される。

²³ *HB* (1988), 350. (*All italics are mine.*)

²⁴ 〈自己意識—内—完結行為〉〈自己解釈的了解行為〉という語は、「サクラメントなき、手前勝手に打ち立てられた宗教」としてのキリスト教の限界を示すために考案した筆者による造語である。前者は “concluding acts within [one’s] self-consciousness”、後者は “self-interpretive understanding” というような英語的理解となろう。

²⁵ 日本語でいう「教会」は、キリストを中心とした共同体 (community) を前提として成立する「キリストの神秘体」(corpus mystericum Chrisisti)といわれるが、ヘイゼルの説く教会には、肝心な共同体というものがない。彼一人の孤高の教会なのである。そのいみで、彼の教会はこっけいなまでに矛盾を孕んだ確信を反映した「理念型」— 現実の教会の特徴を一部そなえているが、実際には存立しえないし、存立する現実の教会のための指針ともならない — として描かれている。

²⁶ 『新約聖書』では、『マタイによる福音書』16:18 以下に頻出する ἐκκλησία <ἐκ + καλέω (to call, summon, invite) は、“congregation,” “gathering,” “assembly” が基本的な意味であるが、これはやがて

“the congregation as the totality of Christians living in one place,” “the church universal, to which all believers belong” などの意味と なってゆく (Bauer, Walter. *A Greek-English Lexicon of the New Testament and Other Christian Literature* (2nd edition) revised and augmented by Gingrich, F. W. and Danker, Frederick. Chicago and London: The University of Chicago Press, 1979), 238-9).

²⁷ *WB* (1985), 11-2.

²⁸ *WB* (1985), 13: “There was already a *deep black conviction* in him that the way to avoid Jesus was to avoid sin.” (*All italics are mine.*) 須山が「深い、黒々とした、言葉に表すまでもない確信」と訳した (須山 1999), 20) “*deep black wordless conviction*”であるが、“*black*”は“*very evil or wicked*”とも言えるし、“*deep*”は、「奥底の計り知れない」、「きわめて悪質にして旋毛曲がりな信念」(an ill-tempered conviction) とも考えられる。

²⁹ *WB* (1985), 13.

³⁰ *WB* (1985), 9. このようなヘイゼルのこじつけ論証は、彼が兵役に服していたときに考え、実行した「魂の腐敗から免れる (魂が清くあるべく) ための手立て」と似ている。彼は考える。それは、「やっかいな魂というものを — それは悪に改宗することなく、虚無に改宗することにはなるのであるが — きっぱりと忘れ去ることである」 (“...to get rid of it [his soul] without corruption, to be converted to nothing instead of to evil.”) と (*WB* (1985), 14).

³¹ *WB* (1985), 97. (*All italics are mine.*)

³² *John* 20: 25 (*Nestle-Aland* (2005); *RSV* (1971))

³³ *WB* (1985), 71.

³⁴ *WB* (1985), 61-2.

³⁵ *Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G., and Svartvik J.* (2005), **4.29**: “Many state verbs denote ‘private’_state which can only be subjectively verified: i.e. states of mind, volition attitude as intellectual state (believe, think,...realize, understand).”

³⁶ *Ibid.* **16.31**: “These states and acts are ‘private’ in the sense that they are not observable: a person may be observed to assert that *God exists*, but not *to believe that God exists*. Belief in this sense ‘private.’ (*All italics are mine.*)

³⁷ *WB* (1985), 8-9. (*All italics are mine.*)

³⁸ *WB* (1985), 35.

³⁹ *WB* (1985), 51. (*All italics are mine.*)

⁴⁰ *WB* (1985), 113-4. (*All italics are mine.*)

⁴¹ 信仰がたんに「こころ」や「内面の問題」であるならば、それは

“Cartesian disease”に深く苛まれた独我論的信仰(solipsistic faith)にすぎない。けっきょくのところ、誰にもわからず、誰ともわかちあうこともできないのだ。

⁴² Descartes, René. “Discourse on the Method,” Part 4, *The philosophical Writings of Descartes*, ET. Cottingham J, Stoothoff and Murdoch D, Cambridge University Press: Cambridge, 1985, vol. I, 127.

⁴³ Ryle (1990), 120. ライルは、“believe”を用いる言明 (dispositional statement) は「観察されたことや観察されうる事態・状況の報告ではないし、観察されなかったことや観察されえないことの報告でもない。起きたことを語るものでもない」と述べ、“disposition”という語がもつニュアンスを良く伝えている。

⁴⁴ Quine, W. V. O. and Ullian, J. S. *The Web of Belief*, Random House: New York, 1978^{2nd}, 10ff. (*All italics are mine.*)

⁴⁵ パウロは、『ローマの信徒への手紙』 10: 9-10 において、“ὅτι ἐὰν ὁμολογήῃς ἐν τῷ στόματι σου κύριον Ἰησοῦν, καὶ πιστεύῃς ἐν τῇ καρδίᾳ σου ὅτι ὁ θεὸς αὐτὸν ἤγειρεν ἐκ νεκρῶν, σωθήῃς: καρδιά γὰρ πιστεύεται εἰς δικαιοσύνην, στόματι δὲ ὁμολογεῖται εἰς σωτηρίαν. [If you confess with your lips that Jesus is the Lord and believe in your heart that God raised him from the dead, you will be saved. For man believes with his heart and so is justified, and confess with his lips and so is saved.”と述べている (*Nestle-Aland* (2005); *RSV* (1971))。この箇所は、「神はイエスを死者のなかから復活させたと、・・・『口で言い表し』、ころから『信じる』」ことが、救済と義認への“disposition”となる、と読み替えることができる。またパウロは、ὁμολογέω (confess)という動詞によって（ここでは、ὁμολογήῃςは「アオリスト・接続法」ὁμολογεῖταιは「受動態」）、「信じること」が個人的ものや秘私的なものではないこと、つまり「個々人のこころの内面的問題ではない」ことを明確に見取っている。

⁴⁶ Ryle (1990), 114.

⁴⁷ 「信じる」ことが“disposition”あるいは“habitus” (habit) であるという理解は、すでにトマス・アクィナスにみられる。彼は、“...sicut *fides* dicitur quandoque id quod *creditor*, quandoque vero *ipsum credere*, quandoque autem ipse *habitus* quo *creditor*.” (信仰は、われわれが信じること、信じているという (行為) それ自体、信じることによる習慣それ自体とも言われる)」と述べている (*Aquinas S. T.* (1980), I-II, q. 55, a. 1. ad 1sol.)。ここで、“quandoque,”

“quandoque vero,” “quandoque autem” 等の接続語は、煩瑣な日本語表現になるため削除した。なお、“quandoque autem ipse *habitus quo creditor.*” という箇所は、「信仰」(fides) が神学的徳 (theological virtue) であるといういみで (*habitus*) とみなされるということである。(All italics are mine.)

⁴⁸ *WB*(1985), 20: “He said he had only a few days ago *believed in blasphemy* as the way to salvation, but that you *couldn't even believe in* that because then you were believing in something to blaspheme” (*WB*(1985), 141) という記述は、ヘイゼル自身、自ら述べていることが自家撞着 (self-contradiction: a logical inconsistency) に陥っていること認識していたことを明らかにする。しかしながら、彼はそのことを認めず、虚無の世界に突き進んで行くのである。(All italics are mine.)

⁴⁹ *WB*(1985), 113. (All italics are mine.)

⁵⁰ Plato, *The Sophist* (The Loeb Classical Library), Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press; London: William Heinemann. 1987, 265ff, 237A: “τὸ μὴ ὄν εἶναι”

⁵¹ A. D. 381 年の公会議で定められた Nicino-Constantinopolitan Creed のなかに “Credo in...visibilium omnium et invisibilium” とあるように、「見えるもの」や「見えないもの」のすべても「信じる」という動詞の意味領界にある。2.0 で引用した『ヨハネによる福音書』20: 25 で、イエスの弟子・トマスに対するイエスの応答 (20:29) μακάριοι οἱ μὴ ἰδόντες καὶ πιστεύσαντες. (“Blessed are those who have not seen and yet believe.”)もこのことを裏打ちする。

⁵² 亀田 (2020) 1-12.

⁵³ *WB*(1985), 61-2

⁵⁴ *WB*(1985), 62.

⁵⁵ *WB*(1985), 139-40.

⁵⁶ この脈絡で、「キリストのいない聖なるキリストの教会」(The Holy Church of Christ Without Christ) に対してヘイゼルが言い放った言葉 (“It [The truth] doesn't cost you any money to know the truth! You can't know it for money.” *WB*(1985), 105) を逆手にとって解釈すると、「虚無を知るために金は必要ではなく、金で虚無が分かるわけではない！」という面白い結果となる。このように、*WB*(1985) という作品は「言葉遊び」や「こっけいさ」で満ちている。

⁵⁷ *WB*(1985), 140.

⁵⁸ *WB*(1985), 143.

⁵⁹ *WB*(1985), 144.

⁶⁰ *HB*(1988), 350: “Haze knows what the choice is....*throw away everything and follow Him...*” とオコナーは述べているが、この場合の “Him” はイエス・キリストを暗示する。眼を焼き潰すことから始まる「放下」(self-abandoning) は、ヘイゼルにとっての犠牲行為 (sacrifice) ともいえるが、そのことによって、“he was a mystic and he did it.”とするオコナーの見解 (*HB*(1988), 116) は「注意深い再考」を要する。(All italics are mine.)

⁶¹ Cf. **2.1**. フラッド婦人には、五官の一つとしての「視覚」を失ったヘイゼルが何かを見ているような表情をしていると思えた (To her, the blind man had the look of seeing something [*WB*(1985), 147].). これに対して、フラッド婦人に対するヘイゼルの言葉 “Mind your business,” he said rudely. “*You can’t see.*” (*WB*(1985), 153) は、「非視覚的ないみで、もの・ことの真相が見え始めた」ヘイゼルの存在状況を示している。

⁶² *WB*(1985), 154.

⁶³ ヘイゼルに「否まれた者」イエスが、今や彼自身の「存在の基底」となった。ここでは、「ルカによる福音書」20: 17 で引用されている「詩篇」118: 22 の文言 ([*RSV*(1971): the very stone which the builders rejected has become the head of the corner?]) との関係に注目する。

⁶⁴ *WB*(1985), 152-3.

⁶⁵ *WB*(1985), 35.

⁶⁶ この解釈は、オコナー自身が “H. Motes is such an admirable nihilist. His nihilism leads him back to the fact of Redemption, however which is what he would have liked so much to get away from.” と述べていることに合致する (*HB*(1988), 70)。

⁶⁷ *WB*(1985), 149.

⁶⁸ *WB*(1985), 151.

⁶⁹ *WB*(1985), 152-3.

⁷⁰ *WB*(1985), 154. これは、パスカルがおこなっていた苦行を想起させる。この点については、須山 (1999), 248.においても言及されている。

⁷¹ *WB*(1985), 149f, 151.

⁷² *WB*(1985), 154.

⁷³ *HB*(1988), 350. (All italics are mine.)

⁷⁴ 例えば、ヘイゼルが『ヨハネによる福音』5: 24 の記述にあるようなしかたで(*Nestle-Aland*(2005))、「イエスの言葉を聴いて、イエスを遣わされたお方を信じたがゆえに永遠の命を受け」(ὁ τὸν λόγον μου

ἀκούων καὶ πιστεύων τῷ πέμπαντι με ἔχει ζῶν αἰώνιον)、・ ・ ・「裁かれることなく、死から出でて命へと過ぎ越してしまっている」(eis krioun ouk êρχεται ἀλλὰ μεταβέβηκεν ἐκ τοῦ θανάτου εἰς τὴν ζῶν.) というようなことは *WB* (1985) のテキストからは読み取ることにはできず、確証もできない。動詞の μεταβέβηκεν は μεταβαίνω の直説法三人称単数の現在完了形で、『共同訳聖書』では「移っている」とあるが、ここでは完了形のニュアンスをくみ取り、「死から出でて」(ἐκ: out of) 命へと(εἰς τὴν ζῶν)「過ぎ越してしまっている」(μεταβέβηκεν: has passed over) と読む。

⁷⁵ フィクションにおける作家の意図 (fiction writer's intention) の開陳は、あくまでも作品の読み手の理解を妨げるものを取り除く程度のものにとどまるべきである。それを越えた言及は、作品が作家の意図に沿って読まれるべきコードを読み手に提示することになる。結果的に、読み手はすでに「正解」のある、そのいみで自己完結した作品に向かい合うことになる。ピカソは、『ゲルニカ』を描いたとき、〈答え〉は観る者の側の理解に委ねた。フィクションかんしても「然り」ではないだろうか。

⁷⁶ *OED* (2009^{2nd} on CD=ROM, v. 4.0)

⁷⁷ 英語で言えば、“an instinct religiously cultivated/ a natural and intuitive way of acting and thinking that is *inherent* in Hazel Motes”とでも言うべきものである。なお、ここで “inherent” という語は “the basic and permanent part of Hazel Motes that cannot removed”; “existing in Hazel Motes as a permanent, essential or characteristic attribute” と解釈した。

主な引用文献（略記）

- Aquinas S. T.* (1980): Aquinas S. T., *Summa Theologiae, Opera Omnia* 2, Stuttgart-Bad Cannstatt: Friedrich Formnn Verlag, 1980.
- HB* (1988): *The Habit of Being: Letters of Flannery O'Connor*. Sally Fitzgerald, ed. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1988.
- Nestle-Aland* (2005): *Novum Testamentum Graece*. Deutsche Bibelgesellschaft: Stuttgart. 2005.
- OED* (2009^{2nd} on CD-ROM, v. 4.0): *The Oxford English Dictionary*, 2009^{2nd} on CD-ROM, v. 4.0.
- RSV* (1971): *The New Oxford Annotated Bible with the Apocrypha*, New York: Oxford University Press, 1977.
- Ryle* (1990): Ryle, Gilbert. *The Concept of Mind*, Penguin Books: London, 1990.
- Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G., and Svartvik J.* (2005): Quirk, Randolph., Greenbaum, Sidney., Leech, Geoffrey., and Svartvik Jan. *Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, 2005.
- WB* (1985): O'Connor, Flannery. *Wise Blood*, Faber and Faber: London, 1985.
- 亀田 (2020): 亀田政則「「退任記念講義」フィクションと現実：なぜわれわれはフィクションを読むのか？」『福島県立医科大学看護学部紀要』22 (2020), 1-12.
- 須山 (1999): 須山静夫訳『賢い血』ちくま文庫, 1999.

*この論考の「基本的アイディア」は、日本フランナリー・オコナー協会主催の「2024年度夏の読書会・研究会」（中央大学・多摩キャンパス）において報告された（題名：『*Wise Blood* の論理構成』）。その後、再考を加えた論考を「*Wise Blood* (1952) の言語と構成論理」と改題し、「2025年度日本キリスト教文学会全国大会」（福岡）で発表した。なお、*Wise Blood* のテキストにおける“Jesus”の頻出回数等については、中央大学文学部の久保尚美教授に教えられました。ここに感謝いたします。

【論文 2】

「グリーンリーフ」—肉体への制裁を介した魂の救済

加藤良浩

はじめに

「グリーンリーフ」(“Greenleaf,”1956)は、O. ヘンリー最優秀短編賞を受賞し、また『1957年度アメリカ最優秀短編』にも選ばれた作品である。この短編は最初ケニヨン・レビュー (*Kenyon Review*) 1956年夏号に発表され、その後短編集『高く昇って一点へ』(*Everything That Rises Must Converge*, 1965)に収められることになった。

物語の主人公は、牧場を経営するメイ夫人 (Mrs. May) である。ある日彼女の農場に一頭の雄牛がやって来て、それが屋敷の植え込みや、畑の燕麦を食い荒らすようになる。彼女が何より恐れたことは、彼女の農場で飼育している雌牛の種付けの計画がその雄牛によって狂わされてしまうことである。彼女の心配の種となったその雄牛は、実際のところ、日頃怒りを感じる使用人グリーンリーフ一家の O.T と E.T が飼っていた牛であった。恐怖と怒りを募らせた彼女は、侵入した雄牛をグリーンリーフに射殺するように命じるが、逆に彼女自身が、その雄牛に命を奪われることになる。ついに彼女が雄牛に角で心臓を突き刺され絶命しかけたとき、不思議にも彼女自身が「身を屈めながらも、その雄牛の耳に何か最後に遂げた発見をしさやくかのように見えた」(334)¹のである。

メイ夫人が最後に雄牛にしさやくこの行為は、「神秘と接触する身振り」(MM111)と見なすことができるかぎり、彼女が「恩寵」を受けたことを示す行為だと言えよう(野口70)。だが、この「恩寵」のテーマに関わる作品の評価については、ジャンノーネが述べているように、「批評家のこれまでの一致した見方としては、雄牛

の角が女性の肋骨に突き刺さる行為が重要で決定的な意味を表現するというのは、表現上の技巧の点で無理がある」(Giannone 167)、ということのようである。たとえば「グリーンリーフ」の魂の推進力に共感を示すフィーリーでさえ、主人公が「恩寵への悟りと同時に拒絶を示唆しているため曖昧な結末になってしまっている」

(Feely 98) と述べ、ヘンディンは、「とげのある王冠を身につけた雄牛は神を意味しているのかもしれないが、その角で婦人をキリストの処刑のように心臓を突き刺す行為は虚無の認識しかもたらさない」(Hendin 115) との見方を示している。また、シュロスは、「雄牛が、メイ夫人を殺害し彼女の目覚めをもたらす役割を担っていることと、それが啓示をもたらす象徴的な役割を果たしていることは別である」と述べ、メイ夫人は雄牛に心臓を突き刺されそれまでの認識を新たにするものの、その雄牛の行為が彼女に啓示をもたらしてはいないとの見方を示している。

一方オコナー自身は、この「グリーンリーフ」の完成度にはかなりの自信を持っていたようである。実際彼女は、「これは優れたストーリーであり、これまで世話になってきているランサム氏との関係を考えずハーパーズ・バザー (*Harper's Bazaar*) に原稿を持ちこんでいたならば、きっとケニヨン・レビューの倍の稿料を受け取っていたでしょう」(HB146) とすら述べている。これほどまで、オコナーが作者としてこの「グリーンリーフ」に自信を示すのは相応の理由があるのではないか。そして、雄牛がメイ夫人の心臓を突き刺す行為が描かれるのも、それによって彼女に啓示をもたらす必然的な出来事として表現するためではないか。

1

冒頭部分では、月の光をあび銀色に映る雄牛が、メイ夫人の寝室の窓の下に現れる様子が描かれている。それはまるで、辛抱強い神が彼女に求婚をしにきたかのようなようである。この雄牛は、彼女の心臓

を突き破りついには神の啓示を彼女に伝える役割を果たしているという意味では、「メイ夫人に死をもたらす神の正義と同時に、彼女に啓示を示し救済するキリストの愛を象徴している」(Martin 148)とすることができる。それでは、彼女を死に至らしめることを通して救済するというこの逆説はどのような理由で成り立つのであろうか。

雄牛を見たときのメイ夫人の様子は、「肩幅の狭い肩」にナイトガウンを羽織り、緑色のカールクリップが彼女の額の上にくっつきも整然と突き出ており、その下の顔には、眠っている間に小じわを伸ばすための卵白パックが、さながらコンクリートのように滑らかに (smooth as concrete) 塗ってあった」(下線引用者、以下同様)(311)と描写されている。

ヘンディンは、「カールクリップや顔のクリームを使って若さを強制的に保とうとするこの行為は、若さを保つことで時の流れを阻止しようとする彼女の心情、すなわち、息子たちが成長し彼女が農場の放棄に迫られる要因となる時の流れを阻止しようとする彼女の気持ちを表している」(Hendin 113)と述べている。時が経てば、メイ夫人の息子のスコフィールド (Scofield) とウェズリー (Wesley) が成長し、彼女自身も老化しついには亡くなる。それに伴い農場は彼女から不本意にも離れ、経営に全く無関心な息子たちの手に渡ることになるが、これらの出来事は彼女から見て避けることはできない。

自分の死後のことについて心配するメイ夫人に対して、「いつも死んだ後の話ばかりでうるさいんだよ」(321)とウェズリーが言い返す対応からは、彼女が自身の死後の農場の行く末を案じるがゆえ、息子たちに向かって「死んだ後」の話を恒常的にしている様子がうかがえる。だが、実際には、「田舎で暮らすこと自体を忌み嫌い」、「いまわしい酪農業だの使用人だの」(319)と思っているウェズリーが農場を引き継ぐはずもなく、兄のスコフィールドもまた農場の経営には関心がないことを公言している。加えて彼は、母親の死後は、「グリーンリーフ夫人のようなすてきな太った女性」

と結婚し農場経営を彼女に任せるとまで言い、それを聞いたメイ夫人はすぐに、不動産の相続人が「屑のような」(315) 彼らの妻にならないように手続きをしたほどである。結局、時の流れが引き起こすこうした変化、すなわち農場の支配権の譲渡を阻止する彼女の願いが、卵白パックを使って自身のしわを「コンクリートのように滑らか」な状態に保とうとする行為に投影されていることはたしかであろう。

だが、メイ夫人が時の流れを恐れる要因はそれだけではない。眠りながらも、雄牛が絶え間なく着実に反芻している音がまるで何かが家の壁を食べているように彼女には思え、そして、「正体不明のそいつは、私がこの地所と家を持っているかぎり、垣根から食べはじめてだんだん家にせまり、今や家を食べている」ように感じられる。さらには今後も、「これまでと同じ落ち着いた着実な調子で家を食べ続ければ、私と息子たちを食べ、最後に残るのはグリーンリーフ一家だけだろう」(312)、と彼女は考える。このように、彼女から見て時の経過とともに消滅するのは、彼女とその財産に加えて彼女の息子たちも同様であり、残るのはグリーンリーフ一家のみである。事実、時間の流れに影響を受けないかの如く、「グリーンリーフ夫妻は彼女の農場に来て以来ちっとも老けない (had aged **hardly at all**) のであり、その「彼ら一家は元気で繁栄し続け、今度はスコフィールドとウェズリーを食い尽くすにちがいない」

(319) と彼女には思える。つまり、時の流れの影響に無縁なグリーンリーフ一家は、時の流れと一体化して自分たち一家を滅ぼそうとする存在に彼女には映るのである。

このような時間に対するメイ夫人の認識は、次の彼女の発言とグリーンリーフに関しての彼女の内的独白に表れていると言える。彼女は、雌牛の群れに紛れ込んだ一頭の雄牛が及ぼす影響を案じようとはしない息子たちに向かって、「『現実』がどんなものか、いまにわかるよ。その時はもう手遅れだからね (“when it’s too late!”)」

(320) と言い、スコフィールドには、すてきな女性は黒人の保険を販売する男性とは結婚したとらないと気づいた時には「もう手遅

れよ」(it'll be too late.) (315) と告げ、自分たちの家族が時間の圧力にさらされていることを意識したかのような発言をしている。

その一方、グリーンリーフは、故意に時間に無頓着を装っているかに彼女には見える。彼は、やるべき仕事については「三、四回言われた後でやっと一つの仕事をを行う」だけではない。雇用主の自分にできるだけ早く知らせるべき「病気の雌牛については、獣医を呼んでもすでに手遅れになるまで (until it was too late) 自分に知らせないし、仮に彼女の納屋が火事になったとしても、まず女房を呼んで炎の具合を見物させた後で火を消しにかかっただろう」(313) との思いをめぐらせる。メイ夫人の目にグリーンリーフの怠惰な様子が悪の行為に映るのは、こうして彼が、彼女を追い詰めるべく時間と共謀し、故意に時間に無頓着な振る舞いをしているように思えるからである。彼女がグリーンリーフについて言及する際に時間を表す表現が多用されているのも、彼と時間との密接な関わりを強調するためであろう。²

メイ夫人が、「この地所と家を持っているかぎり」雄牛が彼女の家を食べ続けると想像しているように、彼女の恐怖心は自身が持つ所有物の喪失に起因している。「生き抜いていこうとするメイ夫人の強い気持ち、土地や所有物という具体的な物への異様なまでの執着をもたらしている」(Walters 137) と言えるが、「教育費のかかる二人の息子」(316)を育てながら、「ほぼ無一文で何の経験もないまま、荒廃した農場の経営を成功させることができた」(321)のは、ひとえに彼女が物質的な財産への強い執着を抱きながらも、勤勉に働いてきたからだと考えられる。とりわけ夫亡き後女手一つでそれらを成し遂げるためには、いっそう強い具体的な財産への執着が必要だったにちがいない。しかし、彼女を成功へと導いてきたこの要因が、今や彼女に恐怖をもたらす要因として作用するに至ってしまっているのだ。

前述のように、メイ夫人は息子たちに向かって自分の死後の話を何度もしているが、着目したいのは、彼女にとって価値ある財産と

は目に見えるものである以上、死そのものも目に見える人間の肉体の生命の消滅を意味するだけではなく、それが契機となって、農場という具体的な財産の息子たちへの継承を引き起こすということである。

メイ夫人は、自分がそのうち死ぬだろうなどとは息子たちは考えもしないだろう、とつぶやいた後、心の中できっぱりと「十分に覚悟ができた時に死んでやる」(321)と付け加えじっと外の景色を見る。

道の向こうに淡い緑色の牧草地が二つあり、雌牛の群れが草を食べている。その後ろには、その牧草地を囲むように黒い木々がとがったこぎりの歯のような壁を作り、それが木々と無関心で冷淡な空を近づけないようにしている (that held off the indifferent sky.) (321)

「この牧草地の景色を見るだけで心が休まる思いがした」(321)と彼女が感じるのは、木々が作る壁に遮断されることにより、彼女の牧草地が無関心で冷淡な空に近づき接することはない、すなわち浸食され奪われることはないという安堵の気持ちを覚えたからである。彼女にはこの景色が、「彼女自身の性格を反映したもの」(321)に映るが、それはやはり、自分の具体的な財産である農場が侵略されることはありえない、侵略されることは許されない行為であるという、彼女自身の強い気持ちを反映していると感じるからであろう。

具体的な所有物を重視する姿勢を抱くことは、目に見えるものの価値の重視、すなわち目に見えて役立つ実利的な性質を持つものを重視する姿勢を抱くことをも意味している。「教会に通えば、いい娘さんたちと知り合いになれるよ」(320)とのウェズリーに対するメイ夫人の発言が示すように、教会に通う目的は純粋な信仰心からというよりも何らかの実利を得るためである。彼女は「立派なキリスト教徒で、宗教には大いに尊敬の気持ちを抱いている」ものの、

「宗教そのものが真実だとは信じていない」(316)。つまり彼女にとって、宗教とは大いに敬意を払うべきものでありながらも、それは教義の信仰に徹すべきものというよりも、目に見えて役立つ自分の生活の実利を目的としてよいものである。あるときグリーンリーフに向かい、「あなたの奥さんは、宗教のせいで気が変になったのではないかしら」と言い、その後如才なく「何事もほどほどがいいのよ」(332)と述べているが、この言葉には、すべてのことにおいて、実際の生活に役立つように、都合のよい程度に利用すべきだと彼女の姿勢がいみじくも表れていると言える。

目に見えるものの価値の重視は、結果として現れたものに対する比較を試みる姿勢ともつながるであろう。実際メイ夫人は、自分の息子たちとグリーンリーフの息子たちをたえず比較している。だが、彼女の場合問題は、比較の結果たえず嫉妬心にさいなまれると同時に、嫉妬の感情の正当化をはかろうとしていることである。

彼女から見て、グリーンリーフの息子たちはたしかに「活力があって働き者」である。けれども彼らが成功したのは、あくまで第二次世界大戦のおかげにほかならない。彼らはその戦争のおかげで、ちゃんとしたフランス人の女と結婚し、うまい具合に負傷して補償年金を得たばかりか、除隊した兵士に与えられた特権を使い大学の農学部に進学することができた。現在その息子たちは、政府援助を得て煉瓦造りの二戸一棟の家を所有し住んでいる。今後彼らの子供たちが、母親の希望通りカトリックの学校に通いきちんとした話し方や礼儀作法を身につければ、「二十年後には、あの連中は上流社会の人々」(斜体原文)になってしまう、とメイ夫人はスコフィールドとウェズリーに「悪意の怒りを込めて」(318)言う。

彼女が抱くこの「悪意の怒り」は明らかに嫉妬の感情に起因しているが、「私は犠牲者よ」、「これまでいつも犠牲者だったのよ」(327)、「私が女だから取引してもうまいことやれると思っているのよ」(329)との発言や、「怠惰な」(312-13)グリーンリーフとは違って、「私は十五年間休みなしに働いてきたし、気ままに好きなことをやってきたわけではないわ」(332)との発言から見

て、この嫉妬の感情には彼女自身が、不当な方法で不利な立場に追いやられてきたという怒りの気持ちが込められているだけではない。その感情の根底には、彼女が置かれた不利な境遇を乗り越えるため人一倍努力することに迫られ、実際働いてきたとの自負の気持ちが存在している。もともと、嫉妬心に起因するこうした怒りという悪の感情こそが、あたかも「すべての精神的な力が、悪魔に挑発されただけで再びみなぎってくる」（328）と彼女が感じたときの悪魔の挑発が引き起こすエネルギーに似て、彼女のすべての精神的な力を奮い立たせる力となったのではないか。そしてその力が、「狭い肩幅」（311）、「小さな顔」（315）、「華奢な青い静脈の浮き出た小さな手」（322）に象徴される弱々しく華奢な彼女に力を与え、物質的な財産の形成に寄与する大きな要因として働いたのではないか。

だが、やはりメイ夫人の物質的な財産の形成の要因とも言うべきこの嫉妬として表れた力もまた、彼女を追いこむ要因となってしまう。彼女の息子たちにしても、「決して喧嘩などしない」（326）グリーンリーフの息子たちと違って、争いが一触即発の状態が起こりうる状態であり、スコフィールドからはグリーンリーフを真似た調子で、「おらの生まれと育ちを考えると、よくもまあこれだけいい人間に育ったのが不思議ってものだ」（327）と揶揄される始末である。こうして、メイ夫人の家庭がいつでも争いが起こりうる不穏な雰囲気になってしまっているのは、やはり、彼女が優劣の比較が目に見えて容易な財産の獲得、保持を最優先とするがゆえに、その比較の容易化に伴う優劣の明確化が嫉妬の言動や雰囲気をつねに家庭内にもたらし、彼らの心を乱すからであろう。

皮肉なことに、目に見える財産や物を重視しようとするメイ夫人の価値観を受け継いでいるのが彼女の二人の息子たちである。保険の外交員をしている兄のスコフィールドは、母親の反対にも関わらず専ら黒人相手の保険を販売している。それが「他のどの保険よりも儲かる」（315）からである。弟のウェズリーは大学で教えているが、目に見える世俗的な価値基準に従う彼はその大学が二流である

ことがいやでたまらない。また、メイ夫人と同じく田舎で生活すること自体が嫌いな彼はいつも不平不満を口にしている。しかし、現在住む田舎を決して出ていこうとはせず、またパリやローマについて話題にしたがりながら、アトランタまで行ったことすらない。この移動距離の限界は、ちょうど現実世界を越えることができないメイ夫人の想像力の範囲を比喩的に示しているかのようである。

その一方、目に見える具体的な財産を求めるメイ夫人とは対照的な人物は、グリーンリーフ夫人である。毎日彼女は新聞から、犯罪者が逃亡した記事、子供が焼き殺された記事といった恐ろしい内容の記事の切り抜きを持って森に入り、穴を掘って埋めその場にひざまずく。その後一時間ほど何かつぶやいたり、大きな腕を動かしたりした後、地面にぼったり倒れると動かなくなる。そうした彼女の様子がメイ夫人には、「わいせつな身振りで地面をはい回り」(317)、「そのまま倒れ土にまみれて眠り込んだ」(316)だけ、つまり奇行の末疲れ果て怠惰に眠ってしまっただけとしか映らない。あるときメイ夫人が、「あんたの奥さんは宗教のせいで気が変になってしまったんじゃないの？」とグリーンリーフに尋ねると、彼は、「うちのうちは、腹の半分が虫に食われた男を治したことがありますね」(332)と答え、メイ夫人には奇行としか映らない行為が、現実の成果をあげていることを告げている。実用的な価値にこだわるメイ夫人にいらだったウェズリーが、「なんであんたは役に立つことをやらないんだよ。ミセス・グリーンリーフみたいになんておれのために祈ってくれないんだよ」(320)と主張し、祈りという、実用とは無縁に見える行為に実用的な価値を見出していることは皮肉である。

雄牛が自分の農場の雌牛たちの繁殖計画を狂わせることを恐れるメイ夫人は、その雄牛の持ち主がグリーンリーフの息子たちであることを知るや彼らの農場に向かうが、彼らが不在だったためグリーンリーフが最新式と言っていた攪乳設備を覗いてみることにする。攪乳室のドアを開けて頭を突っ込んだとき、彼女の目に映ったのは、両側の高い窓から日光がいっぱい降り注いでいる、「一点

の曇りもない真っ白なコンクリート造りの部屋（**The spotless white concrete room**）」であった。彼女は「驚きのあまり何秒間か息もできない」（325）ように感じる。彼女は眠っている間に、時間の進行に伴う顔の劣化を食い止めるために、つまり、小じわを伸ばした顔がちょうど「コンクリートのように滑らかに」（311）見えるように、顔に卵白パックを塗っていた。そして、ここで彼女が目にした真っ白なコンクリート造りの部屋が、顔の劣化の原因である時間の進行を阻止すべく、彼女自身の顔に「コンクリートのように滑らかに」塗った卵白パックの様態を連想させることを考慮した場合、そのとき彼女の驚愕の理由が明らかになるように思われる。つまり、グリーンリーフの息子たちが所有する最新の攪乳設備が、彼女にとっての時間進行の阻止の象徴とも言うべき「コンクリートのように滑らかに」塗った卵白パックの様態を想起させるために、彼らは、その設備が彼女の財産を奪う要因となる恐るべき時間の支配からさえも逃れているように感じ、その所有者である彼らの力に圧倒され、威圧されるように感じたのである。

メイ夫人を威圧するのは攪乳室の中に降り注ぐ太陽の光も同様である。牛を分けておくための仕切り棒が「目を細めないと見えないうらい激しくギラギラと」輝いている。そうした威圧を感じるのは、それが彼女の農場の仕切りを燃やしかねない太陽によってもたらされているからである。そのとき外の光はそれほど明るくなかったものの、「太陽がちょうど頭上に来ているため、彼女は、それが銀の弾丸となって今にも脳に落下してくるような意識に囚われる」（325）気配を感じる。

この太陽の光は、メイ夫人に真の姿を知らせる媒介としての役割も果たしている。たとえば、「太陽が木々の梢の背後に沈んだ」後、彼女はグリーンリーフが帽子のひさしの影の中に、彼の「暗くずるような (**crafty**) 顔」と「明るく輝く用心深そうな (**wary**) 目」（329）を見る。これらの表現は、真実を照らす太陽が沈み、事実を客観的に描写する環境が失われた結果、彼女の偏見と嫉妬が支配した描写表現となっている。

その夜夢の中で、彼女は大きな石が頭蓋骨に穴をあけているような音を聞く。しばらくして彼女は、それが「木々の作る空との境界線を焼こうとしている太陽の音」であることに気がつくが、いつものように太陽は「彼女の所有地の外」に沈むはずだと安心し立ち止まって太陽をながめてみる。ところが、最初は「赤くふくれ上がった球体」のように見えた太陽が、見ているうちに「色あせて細くなっていき、ついには弾丸」(329)のようになり、突然木を突き抜け丘を駆け下り彼女の方に向かってくる。そのとき彼女ははっと目が覚めると、太陽の音とばかり思ったのは実は雄牛が草を食べる音であることに気づく。雌牛たちの繁殖計画を乱す元凶である雄牛が、こうして太陽と重なることにより、財産ひいては彼女自身を奪おうとする大きな脅威となりつつあると彼女は感じずにはいられない。

次にメイ夫人が雄牛に会うのは、それが木々の中から牧草地に飛び出し、彼女めがけて突進してくるときである。そのとき、彼女は「完全にじっとしたまま」であったが、それは、彼女が「おびえたからではなく、信じられないという思いで凍りついた (in a freezing unbelief.)」(333)からであった。ここで「信じられない」という意味に相当する語として“disbelief”ではなく“unbelief”が使われているのは、目の前で起こっている、起こりつつある出来事に対して彼女が不信の念を抱いているからではなく、これまでの自分の経験や知識では認識できない出来事が現実には起こっている、起こりつつある、という意味での「信じられない」という彼女の気持ちを言い表すためであろう。と同時に、現在の信念としての“belief”の否定を思わせるその“unbelief”という言葉の使用は、これまでとは全く異なる方向への彼女の認識の転換の可能性を示唆していると言える。

雄牛の一本の角が彼女の心臓を貫き、もう一方は脇腹へ回って、ふりほどけないほどにメイ夫人をしっかりと取り押さえる。「彼女は前方をじっと見続けていたが、その間目に映るすべての景色がすでに変化し」、「木立は空しかない世界に存在する一つの黒い傷口に見えた」。つまり、メイ夫人が所有する牧草地と空を隔て、彼女

の財産の保全を保障していた黒い木々が作る壁が消滅し、それはもはや、牧草地と空を隔てることはできない単なる黒い傷口のようなものへと変化してしまっていることに彼女は気がつく。彼女にとって、この景色が「彼女自身の性格を反映したもの」(321)である以上、彼女の財産の象徴である牧草地を守る木々の壁の消滅は、財産に執着し、それを是が非でも保持しようとする姿勢に変化したことを意味しよう。そしてこの変化と続いてなされる、彼女への真実の開示とその姿の視覚的再認識が可能になったことを示唆する描写、すなわち、「彼女の顔は、突然視力を回復したものの、光のまぶしさに耐えがたいと感じているように見えた」(333)との描写を合わせて考慮した場合、壁の消滅に伴う光景の変化は、肉体の死によって啓示を受けることにより、目に見える財産への執着は本来あり得るべき姿ではないという真実に衝撃を感じるとともに、そのことに気づいた彼女の心の状態の変化を示唆している。

2

オコナーは、「カトリックの考えでは、不完全で、きわめて人間らしい人、さらには偽善的な人さえ恩寵の働きの媒介となりうるし、実際にそうなるのです」(*HB* 389)と述べているが、「グリーンリーフ」の中で恩寵を受ける主人公のメイ夫人も、短所の中にも長所を備えた「不完全で、きわめて人間らしい人」であると言える。たしかに、彼女は物欲と嫉妬心や差別意識といった悪の心を抱いてはいる。しかしその一方で、朝食の際、自分は決して食べないながらも、息子たちがちゃんと食べたいものを食べているかを毎日座って確かめている行動や、「他の人なら五分で首にするだろう」と思うグリーンリーフを一五年間雇用し、解雇しなかったのは「自分にも改善すべき点があるのではないかといつも思っているからだ」(313)との発言からは、親としての子供への配慮や自らの行動を反省しようとする彼女の善人としての側面すらうかがえる。

オコナーの見方に従えば、メイ夫人が死という制裁を介した形で恩寵を受け、真実の姿を見ることが可能になったのは、こうして彼女が、「不完全で、きわめて人間らしい人」であるゆえにこそとも言えるが、それではなぜ、その恩寵は彼女自身の死を通すことでもたらされたのであろうか。

まずここで考慮したいことは、息子たちへの所有財産の継承をもたらすメイ夫人の死は、彼女にとっては何より、農場という具体的な所有財産の喪失を引き起こすものであるということである。そして、前述のように、メイ夫人にとって価値を持つものとは目に見えるものであるため、彼女にとって死とは肉体の死であり、それは同時に所有財産としての農場の喪失を意味している。それゆえ、彼女が体験したかくもはかなき肉体の滅亡は、農場の一瞬にして起こりうる喪失という認識を彼女にもたらしたことは疑いない。そして肉体の一部である顔は、眠っている間に「小じわを伸ばすための卵白パック」をそれが「さながらコンクリートのように滑らかに」(311)なるように塗っておく必要があるほど、否、懸命に塗っても完全には小じわを元の状態に留めることができないほど、時間に伴う劣化を避けることはできない性質を持つものである。同様にして、形を所有するという点では同じ属性を備えた彼女の所有財産としての農場も、時間の経過に伴い必然的に劣化しやがて消滅することは避けられないがゆえ、その財産に執着することはやがては必ず滅びゆくものに執着することにひとしい。メイ夫人は自身の肉体の死を介した啓示により、こうしたことに気がついたのではないか。

肉体の死を介して恩寵を受けたメイ夫人は、グリーンリーフが銃をかまえて彼女に向かって走ってきたとき、「彼女は彼の方を見ていなかったのにそれでも彼が近づいてくる姿が見える」。この描写は、視力が回復した彼女には、これまで見えなかったものが今では見えるようになったことを示している。そしてこの描写に続いて、「彼女は、彼が目に見えない円の外側を通過して近づいてくる姿を目にした」(334)と述べられるが、ここでの描写は、「目に見えない円」、すなわち目に見えないものの存在を自覚しているグリーン

リーフの姿を彼女が認めていることを意味している。冒頭近くの間でも彼は、「目に見えない円の周辺を歩いていた」(313)と述べられている。だがそこでは、「彼女は目にした」(334)との表現がないため、視点はメイ夫人ではなく作者と判断できる。この二つの描写からは、雄牛に心臓を貫かれた直後には「視力が突然回復したものの光のまぶしさに耐えられないと感じた」(333)、つまり、真実の姿を再び見るができるようになった彼女が、はっきりと目には見えないものを見ることができることになったと解釈できる。

そのとき彼女に見えてきたものとは、「目には見えない円の外側」(334)を通るグリーンリーフの姿、すなわち時間の経過に伴う劣化とは無縁な彼の姿である。さらに、それが時の流れの影響を直接受ける象徴としての肉体とは対照的なものであることを考慮すれば、このとき彼女がグリーンリーフの姿に認めたものは、いみじくも彼女の息子のウェズリーが示唆していた、グリーンリーフの妻が全身を使って帰依を表現しようとしていた魂の存在、つまりは時の流れに影響を受けない精神としての魂の存在ではないか。そして彼女が肉体を失うことと引き換えに得たものは、彼女自身の中にも時間に決して影響されない不滅の魂、すなわち永遠の魂が存在するとの認識であり、その認識によって、彼女は精神的に救済されたと言えるのではないか。

そしてまた、時の流れの影響を受けない精神的な価値を認めるグリーンリーフの息子たちが、「けんかはしない」状態を保持していることを彼女が知ったことを考慮した場合、雄牛に心臓を突き刺されたメイ夫人が、その雄牛の耳にささやいた内容が明らかになるように思われる。それはつまり、時の流れに影響を受けることも、また目に見えないがゆえ人々の心に争いを引き起こすこともない魂の存在に気づいたということであり、その滅することのない永遠の魂と共存しない肉体の存在は無意味である、という彼女が理解した内容であるにちがいない。

注

1. テキストは Flannery O'Connor. *The Complete Stories*. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1971. を使用。訳は拙訳。なお翻訳にあたっては、横山貞子訳『フラナリー・オコナー全短編』（上巻）（ちくま書房、2003年）を参照した。以下引用の後、括弧内にページ数を示す。
2. グリーンリーフの言葉に立腹したメイ夫人は、彼に向かって、「感謝しようと思っても手遅れになっている (Some people learn gratitude too late.)人もいれば、グリーンリーフさん、ずっと感謝できないで終わる人もいます(some never learn it at all.)」（下線引用者）（329）、と述べているが、この「感謝できずに終わる」とは彼に対する当てこすりであり、それが「手遅れに」さえならないと時間の概念と重ねることで、彼の無礼ぶりを表現していることがわかる。つまりこの表現には、彼は時間に遅れるどころか、遅れているという程度や概念を超えるほどはなはだしく無礼な人間である、との彼女の気持ちが込められていると言える。

引用文献

- Feeley, Kathleen. *Flannery O'Connor: Voice of the Peacock*. New Brunswick, NJ: Rutgers UP, 1972.
- Giannone, Richard. *Flannery O'Connor and The Mystery of Love*. New York: Fordham UP. 1999.
- Hendin, Josephine. *The World of Flannery O'Connor*: Eugene, OR: Wipf and Stock Publishers., 1970.
- Martin, Carter W. *The True Country: Themes in the Fiction of Flannery O'Connor*. Nashville: Vanderbilt UP, 1969.
- O'Connor, Flannery. *The Habit of Being*. Ed. Sally Fitzgerald. New York: The Noonday Press, 1979. (HB)
- . *Mystery and Manners*. Eds. Sally and Robert Fitzgerald. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1979. (MM)
- Shloss, Carol. *Flannery O'Connor's Dark Comedies*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1980. Twayne Publishers, 1973.
- Walters, Dorothy. *Flannery O'Connor: Criticism and Interpretation*. New York:
- 野口肇、『フラナリー・オコナー論考』、文化書房博文社、1985年。

【会 則】

第1条 本会は日本フラナリー・オコナー協会(The Flannery O'Connor Society of Japan) と称し、略称を FOSJ とする。事務局を附則のとおり置く。

第2条 本会はフラナリー・オコナーを中心として、関連ある作家や文学の流れについて研究を行うことを目的とする。

第3条 本会は前条の目的を達成するため次の事業を行う。

1. 年次大会の開催
2. 機関誌等の発行
3. アメリカの The Flannery O'Connor Society その他内外の関連学会との連携
4. その他必要と認められる事業

第4条 本会の会費は第2条の趣旨に賛同し、所定の会費を納入するものとする。

1. 会員は、普通会员・賛助会員・学生会員の三種類とする。
2. 会費は年額とし、次の区分による。
3. 普通会员 ¥2,000 学生会員（博士課程まで） ¥1,000 賛助会員 ¥10,000 以上

第5条 本会に次の機関を置く 総会 役員会

1. 総会は本会の最高議決機関であり、毎年1回会長が招集する。
2. 役員会は役員をもって構成し、本会の運営にあたる。役員会は必要に応じ各種の小委員会を設けることができる。

第6条 本会に次の役員を置く。役員の任期は3年とし再任を妨げない。

会長1名 副会長1名 事務局長1名 幹事 若干名 監査2名

1. 役員は総会において会員が互選する。
2. 役員の役職は、総会において役員が互選する。
3. 会長は本会を代表して会務を統括し、副会長は会長を補佐する。
4. 幹事は事務局長の職務を補佐し、会務を執行する。
5. 監査は本会の財務および会務執行状況を監査する。

第7条 本会に顧問を置くことができる。顧問は役員会の推挙により、会長が委嘱し、会長及び役員会の諮問に答える。

第8条 本会の経費は会費及び寄付金により支弁する。本会の会計年度は毎年1月1日から12月31日までとする。

第9条 本会則の改正は総会の承認を経なければならない。但し、附則の事務局に関する箇所については、事後承諾とすることができる。また改正年月日の記入も省略することができる。

附則 1. 本会の準備委員会を平成 24 年 8 月 3 日,日本大学理工学部に於いて発足する。

附則 2. 本会の事務局を平成 25 年 3 月 25 日より,千葉県船橋市習志野台 7-24-1 日本大学理工学部一般教育教室英語系列 中村文紀研究室に置く。

附則 3. 会則は平成 25 年 3 月 25 日から施行する。

附則 4. 本会の事務局を平成 28 年 3 月 26 日より,暫定的に神奈川県横須賀市走水 1-10-20 防衛大学校総合教育学群外国語教育室 田中浩司研究室に置く。

附則 5. 本会の事務局を平成 29 年 3 月 25 日より,東京都八王子市東中野 742-1 中央大学文学部英語文学文化専攻 久保尚美研究室に置く。

附則 6. 平成 30 年 3 月 17 日の総会にて本規約の第 4 条の 3 及び第 8 条の改訂,第 4 条の 4 の削除,会誌「投稿規定」の規定 1 及び 3 の変更,「執筆要項」5 の削除が承認された。

附則 7. 令和 3 年 3 月 20 日の総会にて会誌「投稿規定」の規定 1 について,以下のように改訂することが承認された。

「本誌は,フラナリー・オコナー協会の学会誌であり,オンライン・ジャーナル(不定期)として発行する。」

【投稿・執筆規定】

◆投稿規定◆

1. 本誌は、フラナリー・オコナー協会の学会誌であり、原則として年に1回オンライン・ジャーナルとして発行する。
2. 投稿原稿は、フラナリー・オコナーに関連する論文とし、未発表のものに限る。但し、学会で口頭発表したものについては、その限りではない。その旨を注に明記すること。
3. 応募締切 毎年7月末日 原稿提出締切 毎年10月末日
4. 原稿送付方法 原稿をワードの添付書類としてメールで編集責任者に送ること。その際、略歴（所属学校・機関、身分）をメールの本文に記入すること。
5. 原稿採択方法 査読委員による査読を経て決定する。
6. 校正 校正は2校までとする。初校は1週間以内、再校は3日以内に返送すること。
7. 上記以外の案件については、協会役員会における判断が優先される。

◆執筆要項◆

1. 字数 和文論文は12,000字程度、英文論文は7,000語程度を目安とする。
2. 書式 和文はMS明朝、英文はCenturyとし、いずれもフォントは12ポイントで横書きとする。
3. 本文の注記
 - a) アラビア数字を用い、文末注（後注）とする。
 - b) 外国の人名・地名・書名は、初出の箇所で日本語の後ろの（ ）内に併記する。
4. 書式の詳細については、『MLA 新英語論文の手引き』（北星堂）、*MLA Handbook for Writers of Research Papers* の最新版を参照のこと。

【活動報告】

◆日本フラナリー・オコナー協会 設立大会

日時：平成 25 年 3 月 26 日（火）15:00 ～18:00

場所：日本大学理工学部駿河台校舎 5 号館 2 階 524 会議室

総合司会：田中 浩司 氏（防衛大学校）

開会のことば／会場校あいさつ

設立にあたって

設立準備委員会副委員長 田中 浩司 氏

特別シンポジウム 「日本におけるフラナリー・オコナー研究史」

司会・講師：野口 肇 氏 （設立準備委員会委員長／首都大学東京 名誉教授）

講師：渡辺 佳余子 氏 （元・東京成徳短期大学）

講師：中村 文紀 氏 （日本大学）

設立記念講演

演題：フラナリー・オコナーの小説世界——アメリカ南部の時空を超えて

講師：前田 絢子 氏 （フェリス女学院大学 特任教授）司会：野口 肇 氏

総会

閉会のことば

◆日本フラナリー・オコナー協会 第 2 回大会

日時：平成 26 年 3 月 26 日（火）15:00 ～18:00

場所：日本大学理工学部駿河台校舎 5 号館 2 階 524 会議室

総合司会：渡辺 佳余子 氏 （元・東京成徳短期大学）

開会のことば／会場校あいさつ

作品研究 "The Comfort of Home"

コーディネーター：中村 文紀 氏 （日本大学）

オープンディスカッション 「cartoonist としてのフラナリー・オコナー」

モデレーター：中村 恭子 氏（白百合女子大学・非）

総会講演

演題：若き日のフラナリー・オコナー——『祈りの記』に寄せて

講師：野口 肇 氏（日本フラナリー・オコナー協会会長／首都大学東京名誉教授）

閉会のことば

◆日本フラナリー・オコナー協会 第3回大会

日時：平成28年3月26日（土）14:30～17:10

場所：日本大学理工学部駿河台校舎5号館2階524会議室

I 開会の言葉・会長挨拶（14:30～14:40）

日本フラナリー・オコナー協会会長 野口 肇氏（首都大学東京 名誉教授）

司会：田中浩司氏（防衛大学校 教授）

II 研究発表（14:45～15:30）

『『カトリック作家』フラナリー・オコナーの宗教観の特殊性——『賢い血』を中心に』

発表者：関根金太郎氏（神奈川県立藤沢清流高等学校 教諭）

司会：田中浩司氏

III 講演（15:40～16:30）

演題：「フラナリー・オコナーのための翻訳の日々」

講師：田中浩司氏

司会：野口 肇氏

IV 総会（16:30～17:00）

司会兼報告：田中浩司氏

会計報告

役員改選

新会長挨拶

次号学会誌原稿募集

その他

V 閉会の言葉（17:00～17:10）

野口 肇氏

◆日本フラナリー・オコナー協会 第4回大会

日時：平成29年3月25日(土) 15:30~17:10

場所：明治学院大学白金キャンパス 本館8階81会議室

I 開会の言葉・会長挨拶 (15:30~15:40)

日本フラナリー・オコナー協会会長 野口 肇氏 (首都大学東京 名誉教授)

司会：田中浩司氏 (防衛大学校 教授)

II 総会 (15:45~16:00)

司会：田中浩司氏

会計報告：野口 肇氏

役員改選、他：田中浩司氏

III 研究発表 (16:00~17:00)

「フラナリー・オコナーの作品における“emptiness”

—“A Temple of the Holy Ghost”を中心に—

発表者：久保尚美氏 (中央大学文学部 准教授)

司会：渡辺佳余子氏 (東京成徳短期大学 元教授)

IV 閉会の言葉 (17:00~17:10)

田中浩司氏

◆日本フラナリー・オコナー協会 第5回大会

日時：平成30年3月17日(土) 15:00~18:00

場所：明治学院大学白金キャンパス 本館8階81会議室

I 開会の言葉・会長挨拶 (15:00~15:10)

日本フラナリー・オコナー協会会長 野口 肇氏 (首都大学東京 名誉教授)

司会：久保尚美氏 (中央大学 准教授)

II 研究報告 (15:15~16:45)

「オコナーの作品構築にみるカトリック・アイデンティティ」

発表者：亀田政則氏 (福島県立医科大学 教授)

司会：久保尚美氏

III 総会 (16:50~17:10)

司会：田中浩司氏 (防衛大学校 教授)

会計報告：野口 肇氏

会則改訂、その他：久保尚美氏

IV 閉会の言葉（17:10～17:15）

田中浩司氏

◆日本フラナリー・オコナー協会 第6回大会

日時：平成31年3月16日（土）15:00～18:00

場所：明治学院大学白金キャンパス 本館81会議室

I 開会の言葉・会長挨拶（15:00～15:10）

日本フラナリー・オコナー協会会長 野口 肇氏（東京都立大学 名誉教授）

司会：久保 尚美氏（中央大学 准教授）

II 研究発表（15:15～16:15）

研究報告：フラナリー・オコナーの作品における「南部白人」の構築性 —”manners”の一側面として

発表者：久保尚美氏

司会：田中浩司氏（防衛大学校 教授）

III 総会（16:20～16:50）

司会：田中 浩司氏

会計報告：野口 肇氏

事務局より：久保 尚美氏

IV 閉会の言葉（17:00～17:10）

田中 浩司氏

懇親会（18:00～20:00）

◆日本フラナリー・オコナー協会 第7回大会（オンライン）

日時：令和3年3月20日（土）15:00～17:00

I 開会の言葉・会長挨拶（15:00～15:10）

日本フラナリー・オコナー協会会長 野口 肇氏（首都大学東京 名誉教授）

司会：久保 尚美氏（中央大学 准教授）

II 研究発表（15:10～16:30）

研究発表：Parker's Back to the Garden

発表者：吉岡リサ氏（川崎医療福祉大学 特任教授）
司会：田中 浩司氏（防衛大学校 教授）

III 総会（16:30～16:50）

司会：田中 浩司氏
会計報告：久保 尚美氏
事務局より：久保 尚美氏

IV 閉会の言葉（16:50～17:00）

田中 浩司氏

◆令和3年 夏の読書会（第1回）（オンライン）

日時：令和3年8月21日（土）午後13:00～15:00

対象作品：“A Good Man Is Hard to Find”

◆日本フラナリー・オコナー協会 第8回大会（オンライン）

日時：令和4年3月19日（土）14:00～16:00

読書会（第2回）（14:00～15:50）

対象作品：“Good Country People”

総会（15:50～16:00）

会計報告,事務局より

◆日本フラナリー・オコナー協会 第9回大会

日時：令和5年3月17日（金）14:00～17:00

場所：中央大学 多摩キャンパス 3号館 3257教室

I 開会の言葉・会長挨拶（14:00～14:10）

日本フラナリー・オコナー協会会長 野口 肇氏（首都大学東京名誉教授）
司会：久保 尚美氏（中央大学 准教授）

II 研究発表（14:15～14:45）

「フラナリー・オコナーの特異性

—アメリカ女性作家に関する計量分析的研究—」

発表者：田中 浩司氏（防衛大学校 教授）
司会：久保 尚美氏

III 読書会（第3回）（14:50～16:30）

対象作品：Flannery O'Connor, “The Enduring Chill”

司会：亀田 政則氏（福島県立医科大学 名誉教授）

IV 総会（16:35～16:50）

司会：田中 浩司氏（防衛大学校 教授）

会計報告：久保 尚美氏

事務局より：久保 尚美氏

V 閉会の言葉（16:45～16:55）田中 浩司氏

◆令和5年夏の研究会・読書会（第4回）

日時：令和5年8月19日（土）（14:00～16:30）

場所：中央大学 茗荷谷キャンパス 2E05 教室

開会の言葉・会長挨拶 日本フラナリー・オコナー協会会長 野口 肇氏

（首都大学東京・名誉教授）

第1部 研究発表「ゲームの中の文学—Night in the Woods における
フラナリー・オコナーの影響」

発表者：関根 金太郎氏

司会：田中 浩司氏（防衛大学校 教授）

第2部 “A View of the Woods” 読書会

◆日本フラナリー・オコナー協会 第10回大会

日時：令和6年3月16日（土）13:30～17:00

場所：中央大学 多摩キャンパス 3号館 3260 教室

I 開会の言葉

II 研究発表

「“Dry September”に見られる米国南部の歴史的・文化的影響と“Everything That Rises Must Converge”に込められた理念と現実との統合」

発表者：加藤 良浩氏（北里大学・東京未来大学 非常勤講師）

司会：久保 尚美氏（中央大学 准教授）

III 読書会（第5回）

対象作品：Flannery O'Connor, “The Artificial Nigger”

司会：亀田政則氏（福島県立医科大学名誉教授）

VI 総会 司会：久保 尚美氏

IV 閉会の言葉

◆令和6年夏の研究会・読書会（第6回）

日時：8月17日（土）14:00～17:00

会場：中央大学 多摩キャンパス（3260教室）

開会の言葉：日本フラナリー・オコナー協会会長 田中浩司氏（防衛大学校 教授）

I. 研究発表（14:10～15:10）

発表者：亀田政則氏（福島県立医科大学 名誉教授）

「*Wise Blood* の論理構成」

司会：久保尚美氏（中央大学 准教授）

II. 読書会（15:15～16:45）

”Parker’s Back”

司会：渡辺佳余子氏（東京成徳短期大学 元教授）

◆日本フラナリー・オコナー協会 第11回大会

日時：令和7年3月15日（土）13:30～16:40

場所：中央大学 多摩キャンパス FG館 F504教室（フォレスト・ゲートウェイ館）

I. 研究発表

タイトル「”I Don’t Write ‘the Womanly’ Novel” — フラナリー・オコナー作品におけるキャロライン・ゴードンの影響」

発表者：佐藤 優果氏（早稲田大学国際文学館 研究助手）

司会：久保 尚美氏（中央大学 准教授）

II. 研究報告

タイトル「フラナリー・オコナーが作品に描いたケルト的キリスト教世界」

報告者：田中 浩司氏（防衛大学校 教授）

司会：久保 尚美氏（中央大学 准教授）

III. 総会 司会：久保 尚美氏

◆日本フラナリー・オコナー協会 夏の研究会・読書会（第7回）

日時：令和7年8月16日（土）14：00～17：00

会場：中央大学 多摩キャンパス F403 教室 フォレストゲートウェイ館

開会の言葉：日本フラナリー・オコナー協会副会長 久保尚美氏（中央大学 教授）

I. 研究発表（14：10～15：10）

発表者：加藤良浩氏（東北公益文科大学 准教授）

「グリーンリーフ」—制裁を介した救済

司会：日本フラナリー・オコナー協会幹事 一瀬厚一氏（日本工業大学 講師）

II. 読書会（15：15～16：45）

“Greenleaf”

発表・司会者：熊谷弓子氏（日本フラナリー・オコナー協会 会員）

閉会の言葉：日本フラナリー・オコナー協会会長 田中浩司（防衛大学校 教授）

【事務局より】

本誌第5号は、日本フラナリー・オコナー協会の設立者であり初代会長を務められた野口肇先生のご逝去を受け、追悼号として刊行いたしました。野口先生は、オコナー文学の受容と研究の発展に長年尽力されるとともに、本協会の設立を通じて、研究と交流の基盤を築いてこられました。本号には、先生の学問的ご業績と本協会へのご貢献をふり返り、その歩みを偲ぶ追悼文を3名の先生方よりお寄せいただいております。

あわせて、本号には投稿論文2編を収録しております。追悼号として編まれた本号において、オコナー作品をめぐる新たな視点が提示されていることは、野口先生が大切にされてきた研究の営みが、現在へと引き継がれていることの確かな表れであるように思われます。ご寄稿くださった執筆者の皆さまに、心より感謝申しあげます。

野口先生の研究への尽きることのない熱意を今後も大切に受け継ぎながら、本協会ならびに本誌が、オコナー文学をめぐる思索を共有する場であり続けることを願っております。

(久保)

【執筆者紹介】

渡辺 佳余子 (東京成徳短期大学 元教授)
久保 尚美 (中央大学 教授)
一瀬 厚一 (日本工業大学 講師)
亀田 政則 (福島県立医科大学 名誉教授)
加藤 良浩 (東北公益文科大学 准教授)